



文部科学省

国立教育政策研究所

National Institute for Educational Policy Research

いじめ	追跡
	調査
2013 - 2015	
いじめ Q & A	

平成 28 年 6 月

生徒指導・進路指導研究センター

目 次

はじめに	3
本冊子について	4
■ 本当に、いじめにピークはないのか？	5
■ 本当に、どの子どもにも起きうるのか？	6
■ 小学校や小学校からの追跡で、何が分かったのか？	8
■ 小学校のいじめに、変化があったのか？	9
■ 中学校のいじめに、変化はあったのか？	10
■ 本当に、一部の特別な子どもの問題ではないのか？	11
■ 暴力を伴ういじめは、増えているのか？	12
■ 暴力を伴ういじめも、誰にでも起きるのか？	13
■ 暴力を伴ういじめにも、変化はないのか？	14
■ 調査の概要	15
■ 2013～2015年度 小学校 いじめ被害経験率	16
■ 2013～2015年度 小学校 いじめ加害経験率	18
■ 2013～2015年度 中学校 いじめ被害経験率	20
■ 2013～2015年度 中学校 いじめ加害経験率	22
■ 2013年度 小学校4年生 いじめ被害経験率推移	24
■ 2013年度 小学校4年生 いじめ加害経験率推移	26
■ 2013年度 中学校1年生 いじめ被害経験率推移	28
■ 2013年度 中学校1年生 いじめ加害経験率推移	30
■ 再録2010年度 小学校4年生 いじめ被害経験率推移	32
■ 再録2010年度 小学校4年生 いじめ加害経験率推移	34

はじめに

平成 25 年 9 月 28 日、大津の中学生のいじめ自殺事案が平成 24 年に社会問題化したことをきっかけに生まれた「いじめ防止対策推進法」が施行されました。この法律は、国に対して「文部科学大臣は、関係行政機関の長と連携協力して、いじめの防止等のための対策を総合的かつ効果的に推進するための基本的な方針(以下「いじめ防止基本方針」という。)を定める」ことを求め、学校に対しても「当該学校におけるいじめの防止等のための対策に関する基本的な方針を定める」ことを求めました。

それを受け、多くの学校が「学校いじめ防止基本方針」を策定し、同時に「当該学校におけるいじめの防止等に関する措置を実効的に行うため、当該学校の複数の教職員、心理、福祉等に関する専門的な知識を有する者その他の関係者により構成されるいじめの防止等の対策のための組織」を設置しました。文部科学省の調査によれば、「基本方針」については平成 26 年 5 月 1 日時点で 86.5%、同 10 月 1 日時点で 96.4%の学校が策定、「組織」については 93.8% (5 月 1 日時点) と 98.5% (10 月 1 日時点) の学校が設置、と報告されており、平成 27 年度末にはいずれも 100%となりました。

そのような取組にもかかわらず、いじめが原因と疑われる自殺事案は後を絶ちません。また、いわゆる「問題行動等調査」(児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査)におけるいじめの「認知件数」についても、依然として都道府県間や学校間における差は大きいままです。その背景の一つとして考えられるのは、児童生徒の同じ言動を目にしても、ある教職員(学校、市町村、都道府県)は「いじめである」と受け止めるのに対し、他の教職員(学校、市町村、都道府県)は「いじめではない」と受け止めるという認識のズレです。「基本方針」や「組織」も、教職員の意識や行動が伴わなければうまく機能することはありません。

「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる」というのは、平成 8 年 1 月に当時の文部大臣が出した緊急アピールの一節です。この表現が単なる比喻ではなく、実態そのものであることを示してきたのが、国立教育研究所時代(1998 年)から現在に至るまでの 18 年間にわたって行われてきた国立教育政策研究所の『いじめ追跡調査』です。

その特長は、同じ内容の調査を同じ地点で繰り返すことで経年的な変化を追える点にあります。さらに、児童生徒単位での変容過程を確認できるよう、匿名性を維持しつつ個人を特定できる調査設計になっています。また、調査地点の選定に当たっては、大都市近郊で、住宅地や商業地のみならず、農地等も域内に抱える地方都市を代表的地点として選ぶことで、日本全体の状況を推測する際の根拠となり得るようにしています。市内の全小中学校(小学校 13、中学校 6 の計 19 校)に在籍する児童生徒全員(小学校 4 年生以上)を対象としたコホート(同時出生集団)調査による 18 年間の調査対象者数は、これまでに延べ 16 万人以上になります。

この追跡調査のうち、1998～2003 年にかけて行われた 6 年間分の結果については、国立教育政策研究所／文部科学省編『平成 17 年度教育改革国際シンポジウム「子どもを問題行動に向かわせないために ―いじめに関する追跡調査と国際比較を踏まえて―」(報告書)』(平成 18 年)に収録されています。それ以後の結果については、『いじめ追跡調査 2004-2006』(平成 21 年)、『いじめ追跡調査 2007-2009』(平成 22 年)、『いじめ追跡調査 2010-2012』(平成 25 年)にまとめられています。

本書は、それらの続編で、2013～2015 年の 3 年間分のデータを中心に分析を行うとともに、必要に応じて 2004 年以降の結果も示すなど、最新の結果をより確かな形で示すようにしました。また、今回は「いじめ防止対策推進法」施行による影響についても可能な範囲で言及しています。本冊子をお読みいただくことで、いじめに対する認識の共有が進み、いじめに対する取組がより実効性のあるものになることを願っています。

平成 28 年 6 月

国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター

本冊子について

○本冊子の目的

いじめのような問題（第三者には「見えにくい」行為を含む問題）について、その実態や発生メカニズムを明らかにしようとする際には、児童生徒に対する何らかの調査が不可欠です。また、調査を実施する場合でも、1回限りで終わる単発の調査結果を安易に一般化することには危険が伴います。そこで求められるのが、同一対象に対して複数回の調査を繰り返すことや定期的に調査を行うことです。しかも、複数回の結果をただ並列するだけでは、傾向は明らかになっても、その奥にある変容過程までは明らかになりません。したがって、詳細な分析を行うためには、個人を特定できる形で追跡的な調査を行うことが必要になってきます。

ところが、いじめのようにデリケートな問題を、上に述べたような理想的な形で、とりわけ個人を特定できる形で各学校が実施しようとする、児童生徒が本当のことを答えられない可能性が考えられます（被害経験を答えることによって更にいじめがエスカレートすることを恐れる、加害経験を答えることによって叱責されることを恐れる等のため）。

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターでは、各学校現場が直接に収集することが困難なデータを各学校や教育委員会等に代わって収集・蓄積することで、継続のないじめの追跡調査を実現してきました。本冊子は、その2013～2015年の3年間、計6回にわたる結果を中心に、広く活用していただけるようにしたものです。

○本冊子の構成

3年間6回にわたる膨大なデータをただ羅列しただけでは、そこから何が明らかになっているのかが分かりにくいことでしょう。そこで、本冊子では、前半と後半の2部構成とし、追跡調査ならではの分析から得られる知見によって、いじめに関する「正しい認識」を獲得していただけるように配慮しました。

前半部分では、いじめに関する素朴な疑問に答える「Q & A形式」を採っています。3年間分のデータを再集計したり図示したりして、いじめの実態をより具体的かつ正確に把握してもらえるように配慮しました。『いじめ追跡調査2004－2006』『いじめ追跡調査2007－2009』『いじめ追跡調査2010－2012』で既に議論された内容については単なる繰り返しを避け、その議論の概要と共に新たなデータを付け加え、何が新たに分かったのかを示しています。

後半部分には、この調査がどのように行われたのかについての概要と、調査結果の単純集計結果（いじめに関する項目のみ）を収録しています。2013年度から2015年度までの3年間に、いじめの経験率にどのような変化があったのかを小学校と中学校を分けて見られるよう、いじめの種類ごとに各回の調査結果を男女別の構成比（棒グラフ）で示してあります。また、小学校の4年生から6年生、中学校の1年生から3年生という学年進行に伴い、いじめの経験率にどのような変化が現れるのかについても示しています。さらに、『いじめ追跡調査2010－2012』から一部のデータを再録し、2010年から2015年までの6年間分、すなわち2010年度に小学校4年生であった児童が2015年度に中学校3年生として卒業するまでの学年進行による変化を確認できるようになっています。

※単純集計結果の表示は、以下のような色分けになっています。後半部分のグラフだけでなく、前半部分で示されているものについても同じ色分けになっていますので、年度ごとの集計なのか、特定学年の集計なのかが一目でわかります。

- ・各年度ごとに、小学校の4～6年生までの3学年分を集計したものと、中学校の1～3年生までの3学年分を集計したもの

→薄青色のグラフ

- ・2013年度の小学校4年生が6年生になるまでの3年間の変容と、2013年度の中学校1年生が3年生になるまでの3年間の変容、さらに2013年度の中学校1年生が小学生であった2007年から2009年までの3年間（小学校4年生から6年生になるまで）の変容を示したもの

→オレンジ色のグラフ

■本当に、いじめにピークはないのか？

『いじめ追跡調査 2004 - 2006』では 2006 年秋のいじめの社会問題化を「いじめの第 3 の "ピーク"」と表現することが適切でないと指摘し、『いじめ追跡調査 2007 - 2009』『いじめ追跡調査 2010 - 2012』でも「"ピーク"があったとは考えにくい」とされています。今回のデータからも、同じようなことが言えるのでしょうか。

同じようなことが言えます。いじめの中で多いのは、「暴力を伴わないいじめ」です。その中でも典型的な行為は、「仲間はずれ・無視・陰口」と言えます。図 1-1 と図 1-2 は、中学生の男女別に、この「仲間はずれ・無視・陰口」の被害経験率の推移を示したものです。前回までの結果と今回の結果とを合わせた 12 年間の傾向を見てみると、中学男子では平均 32.2% で ± 8 % 程度の増減、中学女子では平均 39.6% ± 10% 程度の増減であることがわかります。一時的な増減は見られるものの、特に急増したり急減したりするということはありません。いじめは常に起こっているものであり、「流行」とか「ピーク」という表現は、実態を誤ってイメージさせる不適切なものであることが分かります。

また、2006 年秋のいじめの第 3 次社会問題化や 2012 年夏の第 4 次社会問題化の時期、それに続く「いじめ防止対策推進法」制定に至る時期やその後の時期、等においても、特に急変はしていないことが確認できます。いわゆる「問題行動等調査」における「認知件数」の増減はマスコミ報道等の社会的な要因によって左右されやすいのに対して、実際に起きる児童生徒間のトラブルはそうした影響を受けることなく常に起きている、と正しく理解しておくことが大切です。

なお、小学校の被害経験率は(図は省略)、男子では平均が 45.8% で ± 8% 程度の範囲で増減、女子では平均が 51.5% で ± 8% 程度の範囲で増減しており、中学校同様、急増・急減は見られず、常に起きていると言えます。

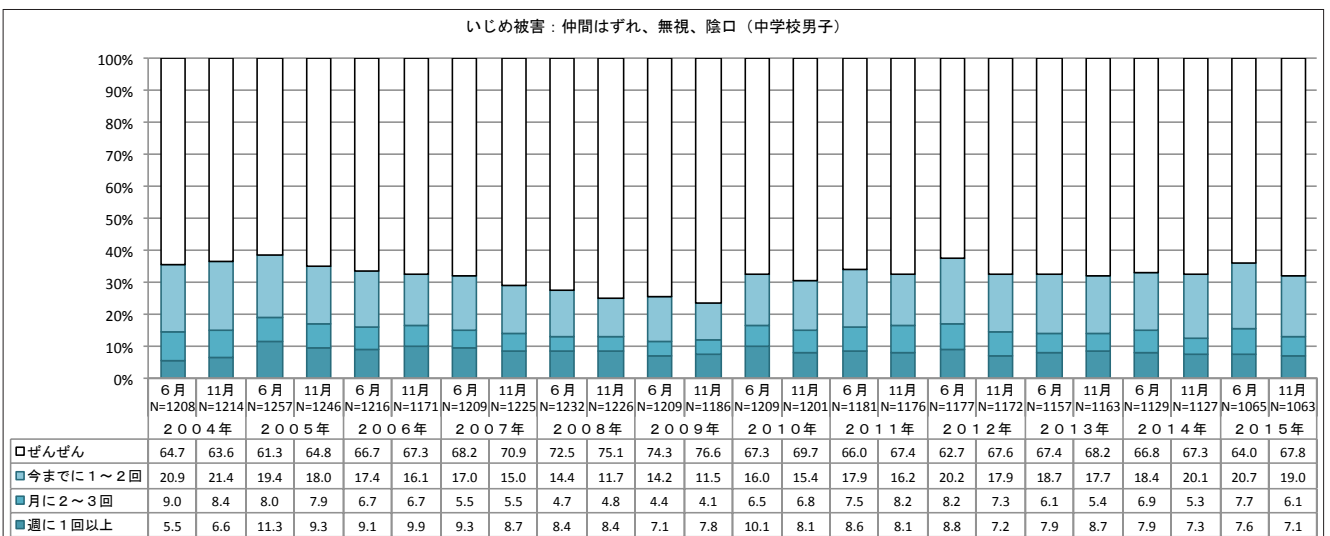


図 1-1 中学生の「仲間はずれ・無視・陰口」被害経験率の推移（男子）2004-2015 年

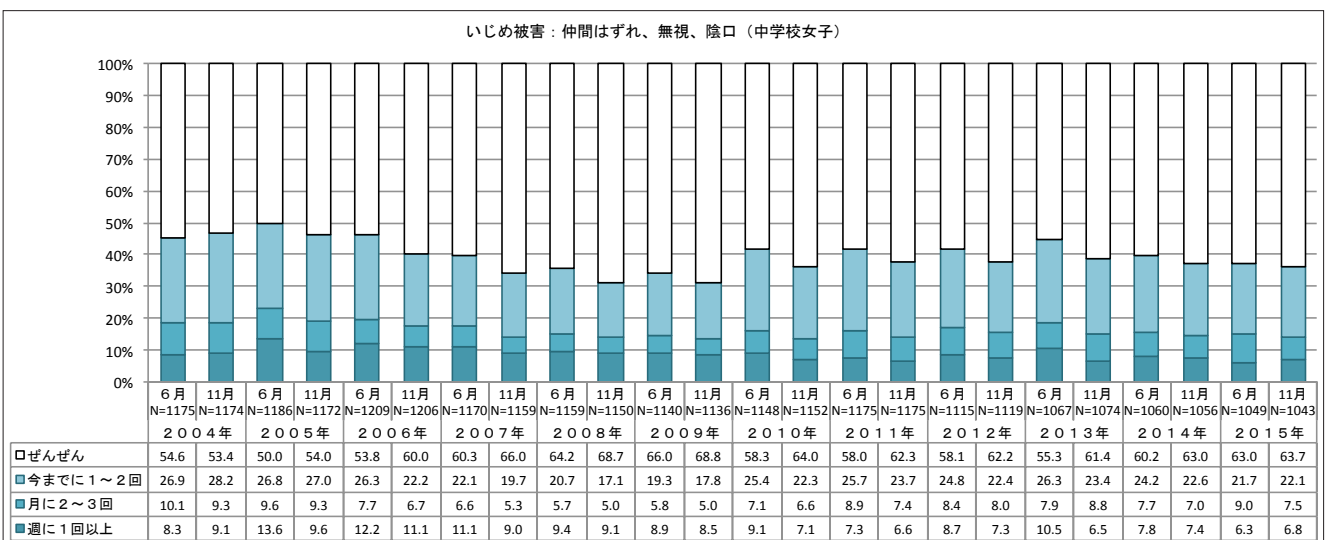


図 1-2 中学生の「仲間はずれ・無視・陰口」被害経験率の推移（女子）2004-2015 年

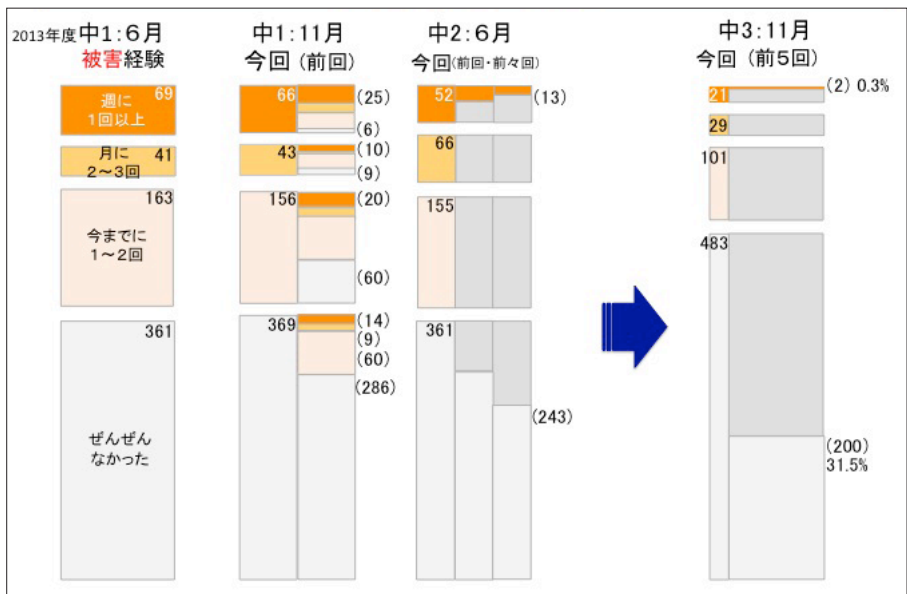
■本当に、どの子どもにも起きうるのか？

Q 『いじめ追跡調査 2004 - 2006』～『いじめ追跡調査 2010 - 2012』でも、いわゆる「いじめられっ子（常にいじめられる子供）」や「いじめっ子（常にいじめる子供）」と呼ぶべき子供はほとんど存在せず、多くの児童生徒が入れ替わりながらいじめに巻き込まれていることが示されました。今回も、同じことが言えるのでしょうか。

A 同じことが言えます。1996年1月に出示された文部大臣の緊急アピールでは、「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる」と明言されています。しかし、これは単なる理論上の可能性の指摘でもなければ、誇張された表現でもありません。いわゆる「荒れた学校」や「問題のある学年」だけにとどまらず、ほとんどの児童生徒がいじめの被害者も加害者も経験するという事実を踏まえた見解と言えます。

下の図2は、「どの子どもにも起こりうる」と表現されている実態を正しく理解していただくためのものです。2013年度に入学した中学1年生が中学3年生になるまでの3年間で、いつ、どのように、被害に遭ったり遭わなかったりするのかわ、「仲間はずれ、無視、陰口」を例にとって追跡的に示してあります。（※用いているデータは、基本的には、巻末の28頁に示されている「問5ア」と同じものですが、3年間6回分のデータが全て揃っている生徒（634名）のみを対象とし、男女合わせた数字が示されている点で数が異なります。）

最初に図の見方を示します。一番左の棒グラフには「中1：6月被害経験」という見出しの下に、「週に1回以上」「月に2～3回」「今までに1～2回」「ぜんぜんなかった」という回答の分布が示されています。各マスの右上の小さな数字は実人数を示しています。その右隣には「中1：11月」という見出しがあり、その下に「今回」と「(前回)」と書かれた二つの棒グラフを合わせた形で、「週に1回以上」「月に2～3回」「今までに1～2回」「ぜんぜんなかった」という回答の分布が示されています。各マスの右上と（ ）内の数字は、やはり実人数を示しています。



(単位は「人数」。なお、図中の灰色部分は内訳を省略したことを示す。)

図2 2013年度中学1年生の「仲間はずれ・無視・陰口」被害経験の3年間の推移

では、詳細に見ていきましょう。まず、「中1：6月」と「中1：11月」の「今回」分（左側）の数字を見比べます。そこには、ほとんど同じような数字が並んでいます。6月の「週に1回以上」の被害経験者69名に対し11月では66名とやや減り、「月に2～3回」を見ると6月の41名に対し11月は43名とやや増加し、「今までに1～2回」を見ると6月の163名に対し11月は156名とやや減少、「ぜんぜんなかった」では6月が361名に対し11月が369名とやや増える、ということがわかります。2013年の6月と11月ですから、どの学校もクラス替えは行っていません。学年もクラスも同じですから、生徒同士の人間関係も大きくは変わらず、被害経験者の数も似た値を示して当然、と思われることでしょう。

しかし、そういった「思い込み」で数字を受け止めてはなりません。ほとんど同じような数字でありながら、その内訳は大きく変わっているからです。その内訳を示すのが、「中1：11月」の右側の「(前回)」の棒グラフです。11月の回答者が前回（中1の6月）はどう回答していたのかを表しています。たとえば、一番下の「ぜんぜんなかった」と答えている生徒は11月時点では369名ですが、その中で「(前回)」も「ぜんぜんなかった」と答えたのは、図中の（ ）に示された

286名であることを、この図は表しているのです。

ここから、次のようなことが読み取れます。11月時点では「ぜんぜんなかった」と答えていても、6月時点では被害を経験していた生徒は83名(=369 - 286)です。その内訳は、「週に1回以上」14名、「月に2～3回」9名、「今までに1～2回」60名、です。反対に、6月時点では被害経験がなかったのに11月時点で新たに被害があったと答えたのは、上に目を転じていただくと分かるとおり、「週に1回以上」に6名、「月に2～3回」に9名、「今までに1～2回」に60名、計75名(=361 - 286)ということになります。

同じクラスの同じ人間関係でほぼ同じ割合の被害経験でありながら、6月に被害経験を訴えていた生徒273名(「週に1回以上」69名、「月に2～3回」41名、「今までに1～2回」163名)中の83名、つまり30.4%(=83 ÷ 273 × 100)が11月に被害を受けなくなっています。また、11月に被害経験を訴えた生徒265名(「週に1回以上」66名、「月に2～3回」43名、「今までに1～2回」156名)中の75名、つまり28.3%(=75 ÷ 265 × 100)は新たに被害を受けるようになった生徒です。クラス替えのない中でさえ、被害経験者の3分の1が半年で入れ替わるのです。

こうした入れ替わりは、「週に1回以上」の被害経験者でも同様です。中1の11月時点で66名いた「週に1回以上」の被害経験者ですが、「(前回)」も「週に1回以上」と答えていたのは()で示した25名です。残る41名(=66 - 25)は、6月には「月に2～3回」「今までに1～2回」「ぜんぜんなかった」と答えていた生徒です。そして、中1の6月に「週に1回以上」の被害経験を訴えた生徒69名のうち、まったく被害を受けなくなったのは14名、つまり20.3%(=14 ÷ 69 × 100)で、「月に2～3回」に減ったのが10名、「今までに1～2回」に減ったのが20名、つまり43.5%(= (10+20) ÷ 69 × 100)です。結局、半年後も高頻度の被害経験が繰り返されたのは、36.2%(=25 ÷ 69 × 100)だけです。

同じように「中2：6月」の棒グラフを見てみます。中1時と比べ、「週に1回以上」と答えたのは52名へと多少減っていますが、「ぜんぜんなかった」と答えた生徒は361名とほとんど変わりません。ところが、中2の6月に「週に1回以上」の被害経験を訴えた生徒の中1からの経験を見てみると、前回・前々回から3回続けて「週に1回以上」という生徒は()内に示された13名になります。これは、中1の6月時に69名いた「週に1回以上」の被害経験者の18.8%(=13 ÷ 69 × 100)です。また、「ぜんぜんなかった」と答えた生徒のうち、やはり3回連続していた生徒は()内に示された243名にまで減ります。1年半の間に被害を受けなかった生徒は38.3%(=243 ÷ 634 × 100)にまで減ります。

4回目、5回目の結果を省略して、一番右の「中3：11月」の今回分を見ましょう。「ぜんぜんなかった」と答えた生徒は、483名と大きく増えています。「週に1回以上」と答えた生徒の数は21名です。ただし、中1の6月から中3の11月までの6回の調査時点中6回とも「週に1回以上」の被害経験があったと答えた生徒はわずか2名(全体の0.3%)にとどまります。また、6回とも被害経験が「ぜんぜんなかった」と答えた生徒は200名(全体の31.5%)にとどまります。

こうした傾向は、加害経験について見た場合にも変わりません。図3は、図2の右端の棒グラフの数値を円グラフ状に示した被害経験(左)と新たに示した加害経験(右)になります。加害経験の最大継続回数は5回(2名で0.3%。6回は0名)である点に注意していただく必要がありますが、この二つのグラフは酷似しています。6回とも加害経験が「ぜんぜんなかった」と答えた生徒は635名中の217名(34.2%)であり、被害経験と同様、多くの生徒が加害の経験を持っていることがわかります。表面に現れた数字だけでなく、過去分の内訳まで見ていくと、特定の児童生徒に偏ることなく、多くの子どもが入れ替わりながらいじめに巻き込まれている実態があることが分かるのです。

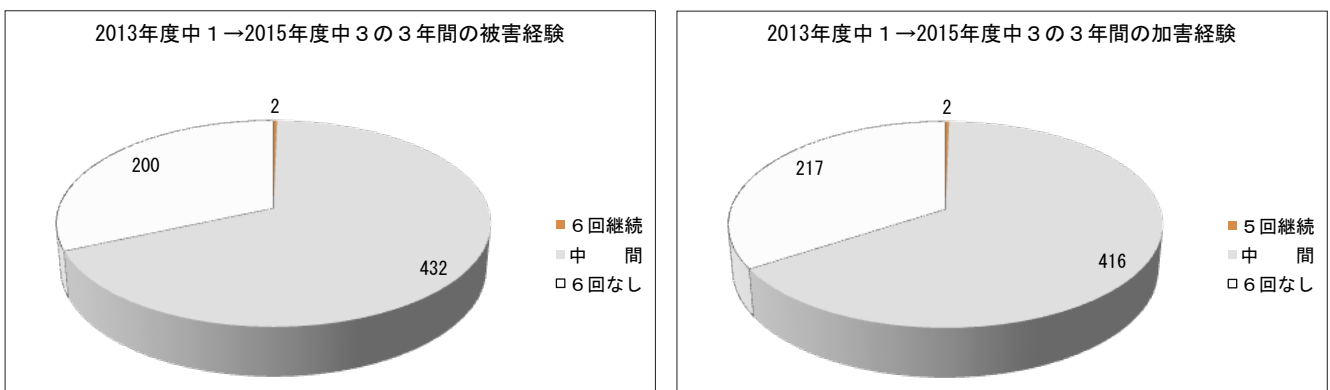


図3 2013年度中学1年生の3年間6回分の「仲間はずれ・無視・陰口」経験(被害・加害)

■小学校や小学校からの追跡で、何が分かったのか？

Q 中学校の発生実態については、よくわかりました。しかし、同じことは小学生についても言えるのでしょうか？
また、小学4年生から中学3年生までの6年間では、どのような発生実態になるのでしょうか。

A 最初に、2013年度の小学4年生が2015年度に6年生になるまでの3年間6回の調査時点における継続状況について、「仲間はずれ、無視、陰口」のデータを示します。図4は、前ページの図3に相当するものになります。（※中学校の場合と同様、被害経験については巻末の24頁、加害経験については26頁に示されているデータと基本的には同じものですが、3年間6回分のデータが全て揃っている児童、被害経験640名、加害経験640名のみが対象で、男女合わせた数字という点が異なります。以下、同様の説明を省略します。）

6回とも「ぜんぜんなかった」と答えた児童の割合は、被害経験では644名中の74名（11.5%）、加害経験では644名中の138名（21.4%）となり、前ページの中学校の図と比べ、より少ないことが分かります。元々の経験率が中学校より高いこともありますが、3年間でより多くの児童がいじめに巻き込まれており、いじめ問題を一部の子供だけの問題と見なすことの誤りがより明確と言えます。また、「週1回以上」が6回ないし5回と続く児童の数も中学校と比べて多くなります。

こうした傾向は、従来からの結果と大きく異なるものではありません。ただし、被害経験と加害経験のグラフにかなりの差が見られる点は、中学校の結果や過去の小学校の結果とは異なるものです。この点については、次ページで検討します。

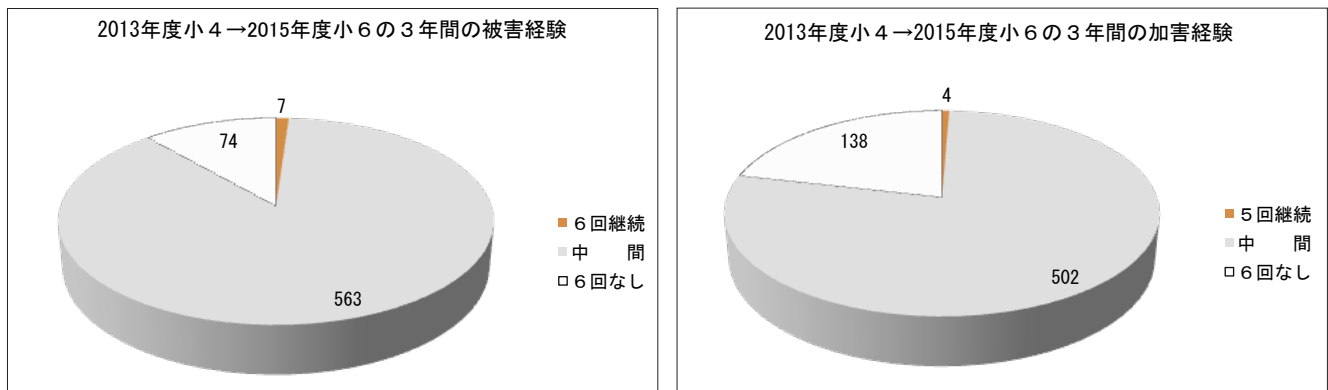


図4 2013年度小学4年生の3年間6回分の「仲間はずれ・無視・陰口」経験（被害・加害）

では、小学4年生から中学3年生までの6年間を通して見た場合にはどうでしょうか。前ページに示した中学生が小学4年生だった2010年までさかのぼり、6年間12回分の結果を示したのが、図5です。まず、左の被害経験ですが、6年間分のデータが揃っている574名中で12回にわたって「週に1回以上」の被害の回答が続いたのは0名、最高は10回続いた1名（0.17%）、そして12回にわたって経験がなかったのが55名（9.6%）でした。また、右の加害経験でも、6年間分のデータが揃っている570名の中で、10回にわたって「週に1回以上」の加害の回答が続いたのが1名（0.18%）、そして12回にわたって経験がなかったのが55名（9.6%）でした。

『いじめ追跡調査 2010 - 2012』の小4から中3の6年間12回の結果では、11回被害の回答が継続した0.16%、12回とも被害経験がなかった12.9%、10回加害の回答が継続した0.3%、12回とも加害経験がなかった12.7%でした。小4から中3の6年間で比較すると、巻き込まれる子供は広がり、特定の子供に集中する割合は減ってきた、とさえそうです。

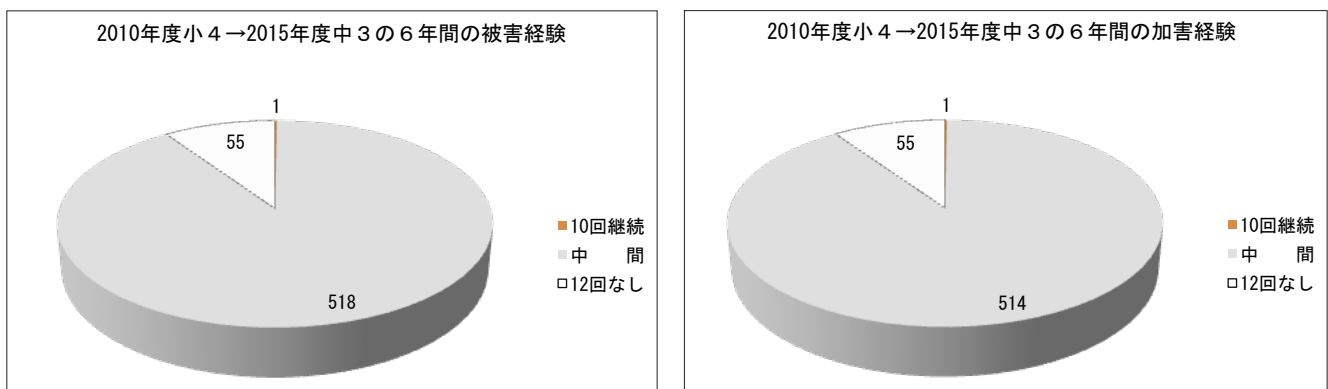


図5 2010年度小学4年生の6年間12回分の「仲間はずれ・無視・陰口」経験（被害・加害）

■小学校のいじめに、変化があったのか？

Q 2013年度には「いじめ防止対策推進法」が施行され、その前年度にはいじめに関する社会の関心も高まっていました。前ページの小学校に見られた被害経験と加害経験のグラフの差は、そうしたことと関係しているのでしょうか。

A この十数年の調査で繰り返し確認されてきたのは、「暴力を伴わないいじめ」の典型である「仲間はずれ、無視、陰口」は、一部の特定の児童生徒だけの問題ではなく、被害で見て加害で見て大きく子供が入れ替わりながら進行し、大半の児童生徒が被害者としても加害者としても巻き込まれる実態です。本冊子の7～8ページで示した中学校や小学校の2013～2015年度にかけての3年間の結果でも、2010～2015年度の小4から中3までの6年間の結果でも同じでした。

また、従来の結果や今回の中学校の結果（7ページ図3）では、「仲間はずれ、無視、陰口」の被害と加害の経験率は驚くほど似ていました。互いに、したり、されたり、という「暴力を伴わないいじめ」の発生実態が確認されてきたと言えます。にもかかわらず、今回の小学校の結果（8ページ図4）では、被害経験率と加害経験率には初めて開きが見られました。

そこで、この傾向がいつから始まったのかを確認したのが、図6です。小4から小6になるまでの3年間の経験の継続状況を、2010年度の小4から示してあります。左側の被害経験率では、「ぜんぜんなかった」と答えた児童は、4年前の13.2%（ $= 93 \div 707$ ）、3年前の14.2%（ $= 99 \div 696$ ）、2年前の13.8%（ $= 96 \div 694$ ）、そして今回（図4）の11.5%となります。それに対して、右側の加害経験率では、それぞれ14.4%（ $= 101 \div 703$ ）、17.7%（ $= 123 \div 695$ ）、21.3%（ $= 147 \div 689$ ）、そして今回（図4）の21.4%となります。小4から小6まで被害経験が「まったくなかった」と答えた児童は直近の3年間で減少傾向を示すのに対し、加害経験はこの4年間、増え続けてきたことが分かります。

理由の一つに、いじめの社会問題化や、法律の施行を受けた「学校いじめ防止基本方針」の策定により、加害行為につながりかねない言動をやめさせようとする気運が小学校において高まった可能性が考えられます。文部科学省の「問題行動等調査」の推移でも、この数年、小学校の認知件数の増加は目立ちます。中学校では従前からいじめと認知してきた行為であっても小学校ではいじめとは認知せず、指導も不徹底なもので終わりがちだったけれども、近年の意識の高まりで小学校においても適切に指導がなされるようになった結果、児童の加害経験に変化が現れた、という仮説も成り立ちそうです。

実際、巻末の26ページと34ページの最上段の図を比較すると、2013年の小4女子の3年間の加害経験は2010年の小4女子の3年間に比べ、一回り少ないことがわかります。図は省略しますが、2012年や2011年の小4女子についても、2013年以降は似た傾向です。教師の意識や指導が2013年頃から変わったことで、児童が加害の頻度を落としたり、軽い気持ちで加わるのをとどまったりした可能性はあります。

ただし、24・32ページの被害経験者の割合は変わっておらず、16・18ページの小学校全体の経験率では被害・加害共に目立った減少傾向は確認できません。多くの子供が入れ替わり加わる「暴力を伴わないいじめ」の場合、一部の子供が加害を控えても、他の子供が行為を続けていけば被害者は減らないからでしょう。

全ての子供を対象に、できるだけ多くの子供がいじめに向かわなくてすむような学校づくりを考えていく必要がありそうです。

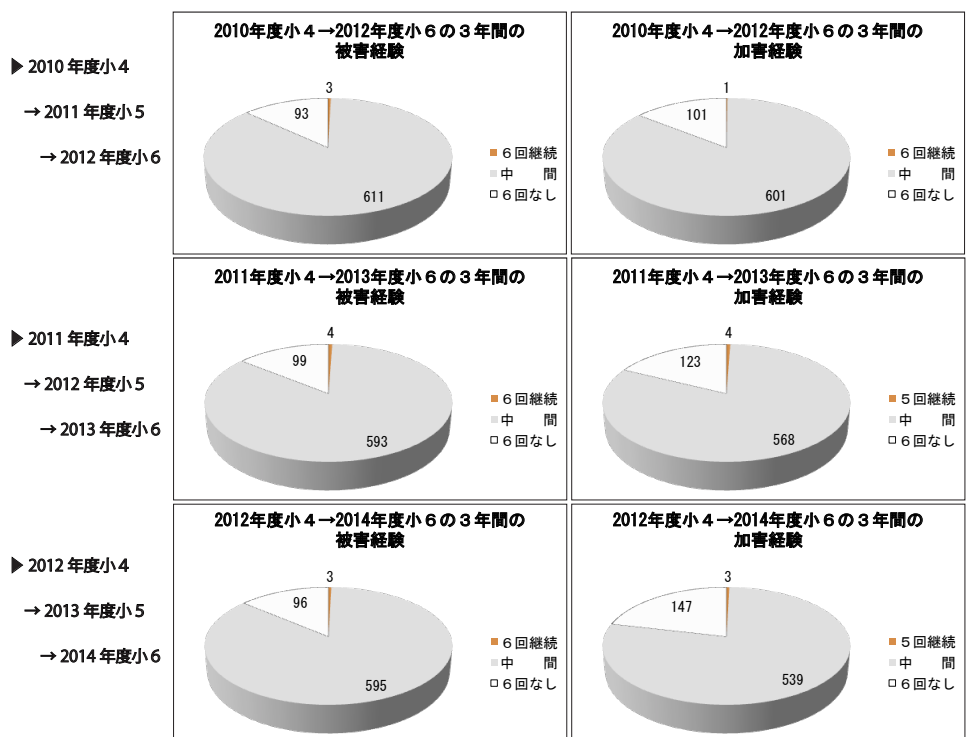


図6 小学4年生から小学6年生までの3年間6回分の「仲間はずれ・無視・陰口」経験の推移（被害・加害）

■ 中学校のいじめに、変化はあったのか？

Q では、中学校の場合には、どうなのでしょう。いじめの発生実態について、2013年度前後から始まるような何らかの変化は見られないのでしょうか。

A 中学校の場合には、7ページの図3に示したとおり、被害経験と加害経験の図は酷似しており、従来からの知見と大きく変わった点は見られません。それを見る限り、2013年度前後に何かの変化があったとは考えにくいのですが、念のため小学校と対比できる形で過去の結果を見ていきましょう。

図7は、中1から中3になるまでの3年間の経験の継続状況を、2010年度の中1分から示してあります。左側の被害経験率に関しては、「ぜんぜんなかった」と答えた者は、4年前の28.7% (= 205 ÷ 714)、3年前の30.0% (= 210 ÷ 700)、2年前の33.2% (= 224 ÷ 674)、そして先に見た31.5%という具合に変化しています。それに対して、右側の加害経験率に関しては、4年前の28.5% (= 203 ÷ 713)、3年前の30.0% (= 210 ÷ 701)、2年前の31.1% (= 209 ÷ 671)、そして先に見た34.2%という具合に変化しています。

中1から中3までの間に加害経験が「まったくなかった」生徒は直近の4年間でやや増加傾向にあり、小学校と同様、教職員の指導がなされるようになった結果、軽い気持ちでいじめ加害に加わる子供が減った可能性はあります。図は省略しますが、2013年の中1男子の3年間の加害経験は2010年の中1男子の3年間と比べ、一回り少ないことが分かっています。しかし、被害経験が「まったくなかった」生徒は増えたり減ったりしており、小学校同様、はっきりしません。また、被害経験と加害経験との間の開きは2～3%にとどまり、小学校のような大きな開きは見られません。

要するに、2013年前後にかけて中学校においても教師の意識や行動に変化があった可能性はあります。しかし、小学校の場合とは異なり、生徒のいじめの実態を質的に大きく変えるほどのものではなかったようです。小学校で加害経験が被害経験よりも少なくなり始めた2010年度の小4は2013年度の中1になるわけですが、8ページの図5から分かるとおり、小4から中3までの6年間で見えた場合には被害経験と加害経験の割合はほとんど同じになってしまいます。

中学校においても、例えば、目の前で起きたいじめにつながりかねない行為について確実に指導するなど、従来よりも教職員の指導がしっかりと行なわれるようになるといった変化は少なからずあったのではないかと考えられます。ただし、そうした指導によって子供がいじめをしなくなったりするというほどのものではなく、また小学校での指導も中学進学後まで継続していじめをしなくなるというほどのものではなかった、と考えられます。

「暴力を伴わないいじめ」については、ここまで繰り返してきたとおり、幅広い子供が加害者としても被害者としても巻き込まれていくものです。教職員の働きかけによって加害の頻度が減ったり、加害をしなくなる子供が一部現れたりしたとしても、直ちに被害者の数が減るとは限りなことが分かります。

つまり、いじめの被害者を減らしていくためには、全ての児童生徒を対象とした未然防止の取組を進めることで、加害者を大きく減らす必要がある、と考えていくべきでしょう。

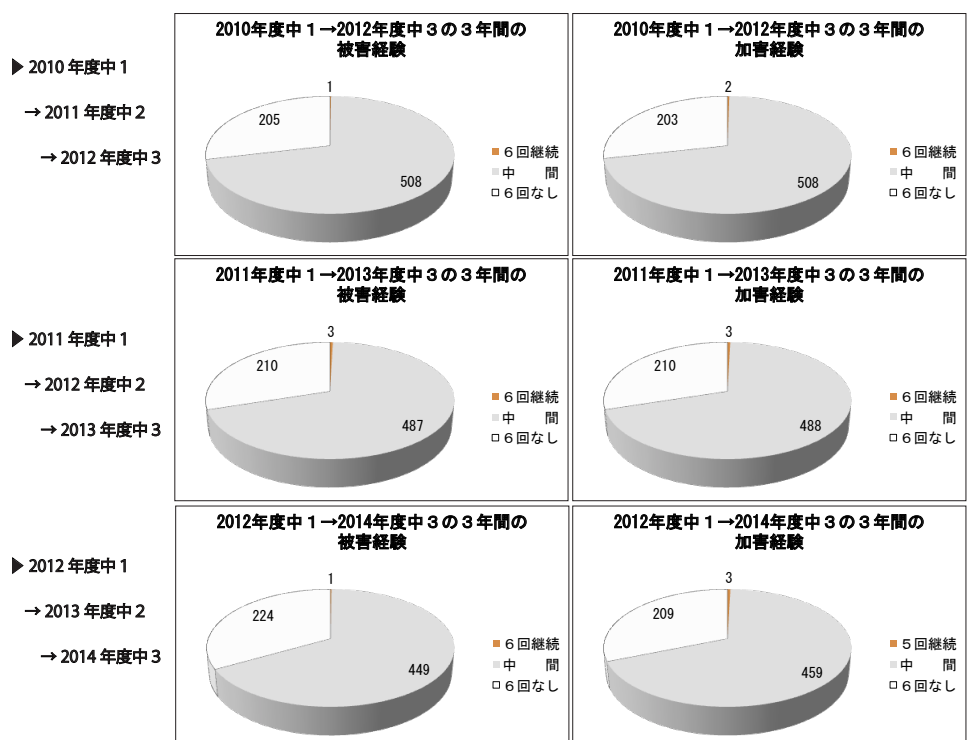


図7 中学1年生から中学3年生までの3年間6回分の「仲間はずれ・無視・陰口」経験の推移（被害・加害）

■本当に、一部の特別な子どもの問題ではないのか？

Q いわゆる「いじめっ子」や「いじめられっ子」と呼ばれるような常習性の高い子供、特に「週に1回以上」という高頻度で被害経験や加害経験を繰り返す子供がほとんど存在しないことは、分かりました。しかし、高頻度の経験に限定しなければ、やはり一部の子どもだけが常習的にいじめに関わっているわけではありませんか。

A 6年間12回の調査で9割の子供が経験を持つ（8ページ図5）としても、大半の子供はせいぜい1～2回の経験にとどまり、やはり教師が普段から「気になる子」が何回も繰り返しているのではないかと考えたい気持ちは分からないでもありません。確かに、「暴力」や「非行」と一般に称されるもの場合には、行為自体の「問題性が高い」ことから、それを行う児童生徒も「問題性の高い子ども」であることが多く、常習的とも言えます。そうした問題の場合には、「気になる子」を中心に見守っていくことが、効率よく未然防止や早期対応を行うことになり得ます。

しかし、「仲間はずれ・無視・陰口」や「からかう・悪口」といった「暴力を伴わないいじめ」に対して、「暴力」等と同じ考え方を適用するのは間違いです。個々の行為自体は「ささいなこと」で「問題性が低い」ことが多いため、誰もが標的になり得るし、みんなが加害者になり得る（＝集団化しやすい）のです。「暴力を伴わないいじめ」の発生実態は、「暴力」や「非行」とは大きく異なり、多くの子供が被害者にも加害者にもなっているという実態をしっかりと受けとめて下さい。

そのことを再確認するために作成したのが、図8です。「週に1回以上」「月に2～3回」「今までに1～2回」といった頻度の多少を問わず、各調査時点ごとに経験があったと答えたら1回分として数えた結果です。6年間で12回の調査時点ですから、最大の回答数は12回となります。上段が被害経験、下段が加害経験の結果です。

例えば、12回の調査時点中6回以上で回答のあった者を「常習的」と仮定した場合（図中の網掛け部分）、被害経験では45%、加害経験でも40%の児童生徒が該当します。一部の特定の児童生徒が何度も繰り返しているだけなのではないか、大半の児童生徒は1～2回くらいの「魔がさした」程度なのではないか等の憶測は、全くの的外れと言えます。

「暴力を伴わないいじめ」の怖さは、一見「ささいなこと」「よくあるトラブル」でありながら、しつこく繰り返されたり、多くの者から集中的に行われたりすると、被害者が大きな精神的苦痛（いらだち・困惑・不安感・屈辱感・孤立感・恐怖感等）を受けかねない点にあります。行為自体が激しくないからと言って、見過ごしてはなりません。

「暴力を伴わないいじめ」は、誰もが被害者にも加害者にもなり得ること、最初はささいなトラブルであっても、いつ深刻ないじめに発展するかはわからないこと、を肝に銘じ、全ての児童生徒を対象に「未然防止」に取り組むことが適切かつ効果的です。

一部の特別な子供に注意を払う、一部の問題を抱えた子供を早い段階で見つけ出す（＝「早期発見」）等の取組姿勢にとどまる限り、9ページで紹介した小学校の結果のように、その効果も限定的なものにとどまり、いじめを減らすことにはならないと考えられます。

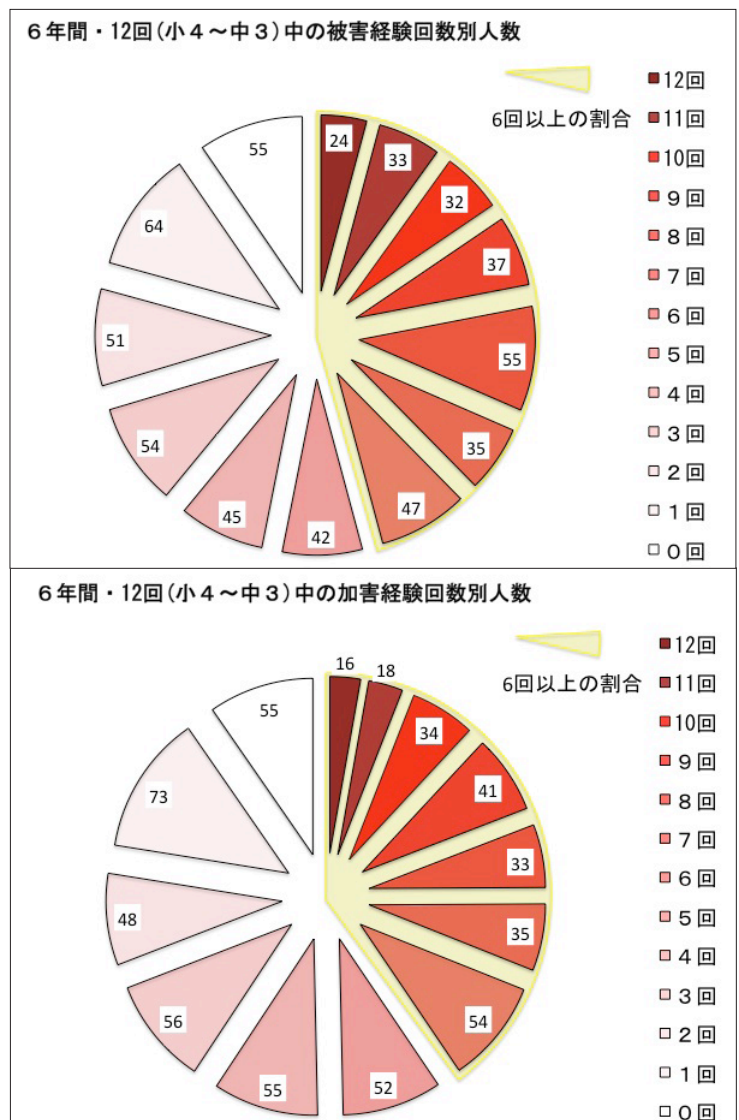


図8 2010年度小学4年生の6年間12回中の「仲間はずれ・無視・陰口」の経験回数（頻度を問わない）（被害・加害）

暴力を伴ういじめは、増えているのか？

第4次社会問題化（2012年）以降、「いじめ」と「暴力」の区別がますます曖昧になり、報道されるいじめについても「暴力を伴ういじめ」に関するものが増えてきたような印象を受けます。実際、「暴力を伴ういじめ」は増えているのでしょうか。

結論から言えば、大きく増えているといった実態は確認できません。下の図9-1と図9-2は、2004年度から12年間分の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」の中学校の経験率を示したものです。12年間の傾向を見てみると、中学男子の場合、19.9%±5%程度で推移しています。全体を見ると2007～2009年が相対的に低かったことがわかります。しかし、「週に1回以上」に着目するとほとんど変わらないうえに、2007～2009年よりもむしろこの数年のほうが低い値を示しています。中学女子の場合、男子と比べるとはるかに少なく、大体7.5%±2%程度で推移しています。また、男子と同様、2007～2009年が相対的に低かったのですが、最近はやや増加しています。ちなみに、小学校の被害経験率を見ると（図は省略）、男子では29.8%±4%の増減、女子では平均17.7%±4%の増減になります。

要するに、「暴力を伴ういじめ」が急増あるいは急減といった事実は確認できません。ひどい暴力を伴う事案のマスコミ報道が増えてきたような印象を受けるのは、そうしたいじめが多かったからということではなく、そうしたいじめが「目に見えやすい」ことと、人々の関心を引きやすかったからではないか、と考えられます。こうした「暴力を伴ういじめ」は「暴力を伴わないいじめ」と比べて「目に見えやすい」ことから発見しやすい点が特徴です。気付いた場合には速やかに対応しましょう。（⇒国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター『生徒指導リーフ Leaf10 いじめと暴力』）

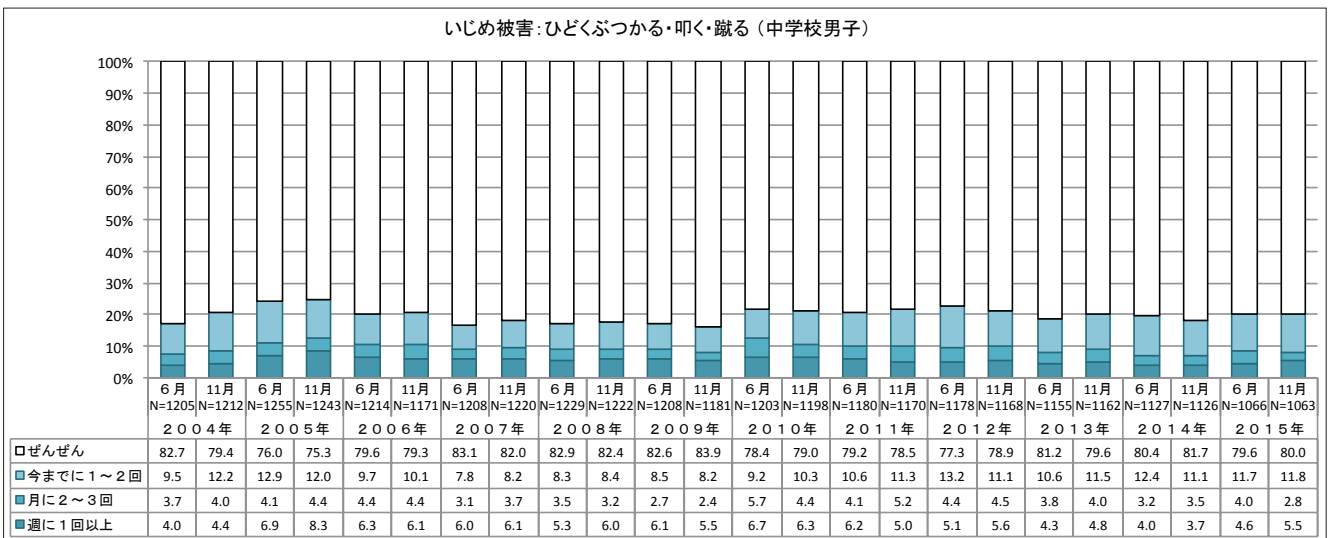


図9-1 中学生の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」被害経験率の推移（男子）

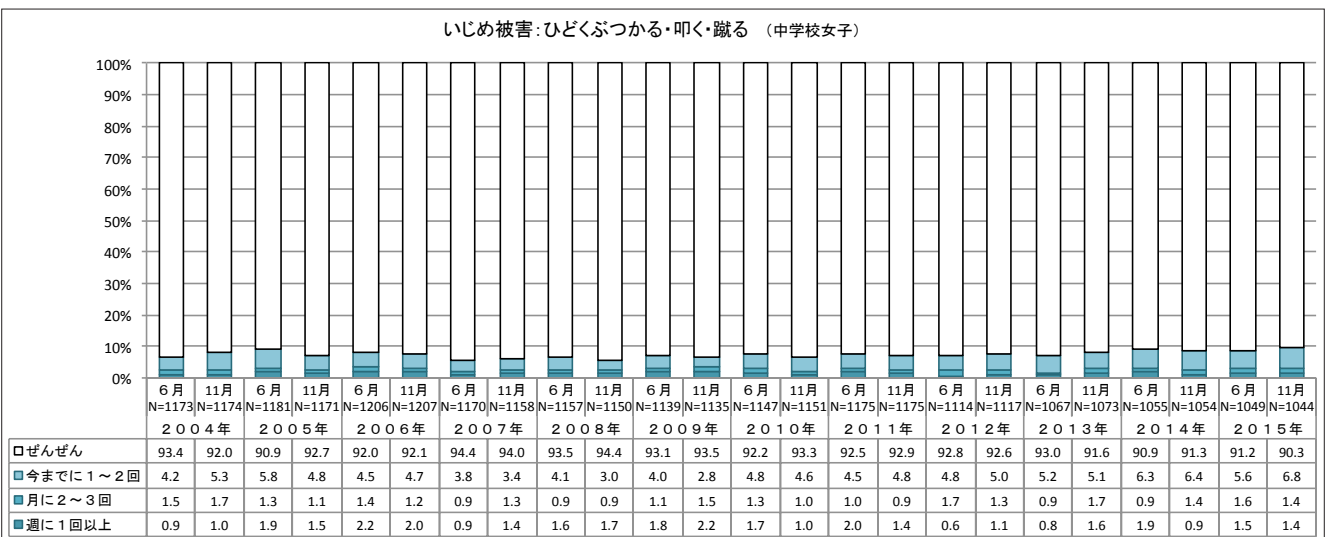


図9-2 中学生の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」被害経験率の推移（女子）

■暴力を伴ういじめも、誰にでも起きるのか？

Q では、「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」のような「暴力を伴ういじめ」も、「仲間はずれ・無視・陰口」等の「暴力を伴わないいじめ」と同じように、どの子どもにも起こりうると考えて取り組んでいけばよいのでしょうか。

A 結論から言えば、「暴力を伴ういじめ」は「暴力を伴わないいじめ」とはかなり異なるもので、どの子どもにも起こりうるかと単純には言えないと考えて下さい。「暴力を伴ういじめ」の代表的な行為である「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」の場合、被害経験率そのものが相対的に低く、とりわけ女子ではかなり少なくなります（12ページ図9）。また、被害を受ける子供にはかなりの広がりがありますが、加害行為に向かう子供はそれほどではありません。それ以上に特徴的なのは、何度も被害や加害を繰り返す子供は限られてくることです。それは、「暴力」の発生実態に近いと考えられます。

そうした実態を確認するために、「仲間はずれ・無視・陰口」の場合（11ページ図8）と同様、小学校からの6年間の結果を示したのが図10です。「仲間はずれ・無視・陰口」とは大きく異なる分布を示すことが分かります。先に見てきた「仲間はずれ・無視・陰口」の場合には、被害にしる加害にしる、経験者の占める割合は9割になるばかりか、12回中1回から12回までの経験ありの回答者があたかも均等割りのように分布していました。特別な児童生徒が存在するというよりも、誰もがいつ被害や加害に巻き込まれてもおかしくない、多くの子供が何度も繰り返す、そんな分布でした。

ところが、図10から分かるとおり、「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」の場合には、そこそこの広がりはあるものの、その多くは少ない回数の経験者になります。つまり、被害にしる加害にしる、12回の調査時点中に1回でも経験ありと回答した者の半数は2回以下の回答者なのです。反対に、12回とか11回にわたって経験ありと回答し続けてきた者の数は非常に限られています。図8にならって、12回の調査時点中6回以上で回答があった経験者を「常習的」と見なした場合（図中の網掛け部分）、被害経験で11.6%、加害経験では5.5%にしかありません。一部の子供が何度も繰り返す一方で、他の多くの子供は数回程度の経験にとどまるのです。これは、3年前の報告書で示した傾向とも酷似しています。

- 「暴力を伴ういじめ」や「暴力」の場合には、
- ・被害経験や加害経験がある者はそれなりの広がりをもちやすくなるものの、「誰にでも起きる」、あるいは「誰でも起こす」というわけではない。
 - ・何回も継続する、繰り返すというより、一時的なもので終わる子供が多数を占める。
 - ・その一方、限られた一部の者は何回も繰り返す。

つまり、「暴力を伴わないいじめ」と異なり、大人の「目に見えやすい」だけに、大人の介入が効果をあげやすい一方、それでも行為を続ける者は常習化しやすい、と考えることができるでしょう。

「暴力を伴ういじめ」は、「暴力を伴わないいじめ」と同じように「いじめ」と呼ばれてはいますが、明らかに異質な行為です。一部の「気になる子」が中心になる「暴力を伴ういじめ」と、どの子どもにも起こりうる「暴力を伴わないいじめ」とでは、異なる対応が求められます。

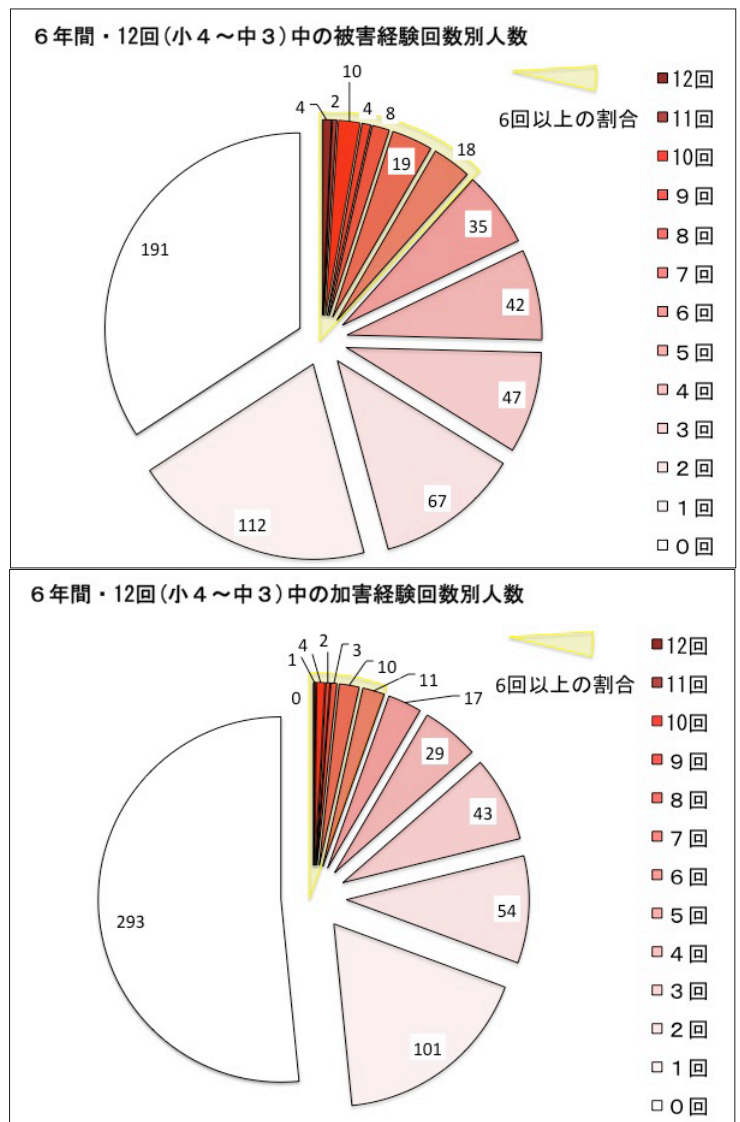


図10 2010年度小学4年生の6年間12回中の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」の経験回数（頻度を問わない）（被害・加害）

■暴力を伴ういじめにも、変化はないのか？

Q 「暴力を伴わないいじめ」に関しては、2013 年前後から小学校の発生実態にのみ、変化が見られました。「暴力を伴ういじめ」に関しては、何か変化が見られるのでしょうか。

A 12 ページ、13 ページの数字を見る限り、「暴力を伴ういじめ」の代表的な行為である「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」について、発生実態に何らかの変化があったと考えることは困難です。念のため、2010 年度の 4 年生から 2013 年度の 4 年生について、それぞれが 6 年生になるまでの各 3 年間の経験率を比較したのが、図 10 です。左側の被害経験、右側の加害経験ともに、その比率には大きな変化は見られません。

ただし、注目していただきたい点があります。それは、3 年間 6 回の間の「週に 1 回以上」の最大継続数の変化です。すなわち、かつては 6 回継続の児童がいたにもかかわらず、被害経験では最大が 5 回に、さらに加害経験では 5 回、4 回と減ってきています。「仲間はずれ、無視、陰口」の場合（9 ページ図 6）とは、明らかに様相が違ってきます。ここに、2012 年度のいじめの社会問題化、2013 年度の法律の施行、2014 年度からの学校基本方針の策定を経た影響を感じとることは、あながち無理ではないと思われます。図は省略しますが、実は中学校の 3 年間のデータでも、同じような傾向が窺えます。

「暴力を伴わないいじめ」とは異なり、行為自体が目に見えやすく、常習的な子供が多い「暴力を伴ういじめ」です。いじめをめぐる世間のきびしい眼差しを受け、高頻度のいじめ行為を何年にもわたって繰り返すような子供に対して積極的に働きかけを行うようになった可能性は十分に考えられます。つまり、「いじめ防止対策推進法」が作られる前後で、教職員の意識や行動が変わったことによって生じた変化である可能性は高い、と考えられます。

しかしながら、課題もあります。そうした変化が見られながらも、各年度の経験率（12 ページ図 9 - 1 ~ 2）や 6 年間 12 回で見た経験率（13 ページ図 10）に大きな変化は見られません。その、一見奇妙な実態は、次のように説明できますでしょう。すなわち、

・「暴力を伴ういじめ」を見つけた教職員は、以前と比べて「早期対応」をしっかりと行うようになった。その結果として、「週に 1 回」という高頻度から「月に 2 ~ 3 回」や「今までに 1 ~ 2 回」へと頻度が落ちる子供が増えた。と、考えられます。

この変化自体は大きな成果です。しかし、被害や加害を大きく減らすには、高頻度で何年にもわたり行為を繰り返すような子供のみを対象としているだけではいけない、ということを示唆してもいます。

「暴力を伴わないいじめ」であれ「暴力を伴ういじめ」であれ、減少させようと思ったなら、やはり全ての児童生徒を対象とした「未然防止」の取組を行うことが不可欠であると言えるでしょう。

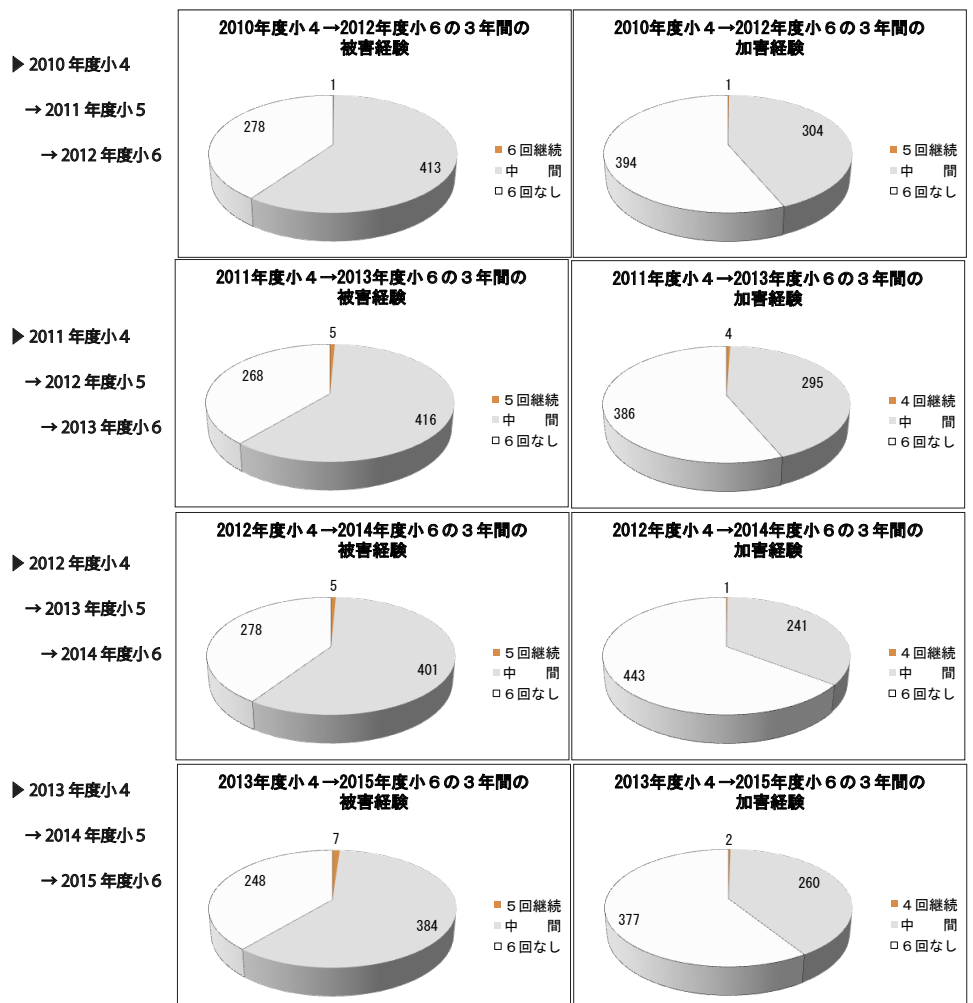


図 10 小学 4 年生から小学 6 年生までの 3 年間 6 回分の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」経験の推移（被害・加害）

■ 調査の概要

調査の時期

6月末と11月末の年に2回、新学期が始まってから（もしくは、夏休みが明けてから）3ヶ月弱の時期に揃えています。ただし、同一日を指定しているわけではなく、学校間で若干の幅があります。

調査地点・対象校

この調査は、1回限りのものではなく、また単に複数回の調査を繰り返すというものでもありません。匿名性を維持しつつ、個人を特定できる形で数年にわたって（小学校から中学校にかけて）追跡していくことを目的としています。それを可能にするためには、調査単位は中学校区（校区内の全小中学校）である必要があります。その場合、調査の客観性や代表性を保つ目的で一般に用いられるサンプリング調査の手法を用いたのでは、膨大な数の児童生徒を扱わねばならないことになります。そこで、日本全体の状況を推測する際の根拠となりうる地点（大都市近郊にあり、住宅地や商業地のみならず、農地等も域内に抱える地方都市）を選び、その市内にある全ての小学校（13校）と中学校（6校）を対象校としています。

対象児童生徒

小学校4年生から中学校3年生までの全児童生徒が対象です。1学年当たりの児童生徒数は、学年や年度によって異なりますが、概ね800名前後で、大きな変動はありません。また、私立中学校への進学もわずかですので、ほぼ市内全域の児童生徒を網羅していると考えられます。

調査の実施

学級単位で一斉に行います。この調査自体は、個々の児童生徒の変容を追跡できるように記名式で行われていますが、教師や友人の目を意識して回答をためらうことのないよう、調査票の配付時にシール付きの封筒を配付し、回答後は各自で速やかに封入できるような配慮を行い、回答の精度を上げるように配慮されています。ほとんどの児童生徒が小学校4年生の時からの調査を体験済みですので、小学校の高学年以降になっても、この調査票に本当のことを答えても不都合は生じない（叱られたりはしない）という安心感の下に回答していることが期待できます。

質問項目

いじめに関する内容のほか、学校や集団への適応感、ストレス、ストレスをもたらす要因、相談相手の有無等が含まれています。下に示したのは、いじめの被害経験を尋ねる項目です。

皆さんは、学校の友だちのだれかから、いじわるをされたり、イヤな思いをさせられたりすることがあると思います。

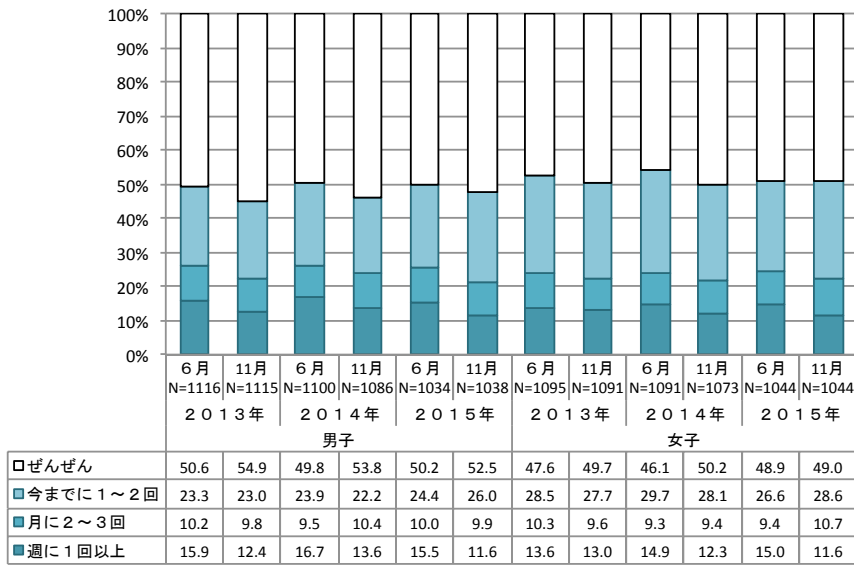
そうしたいじわるやイヤなことを、みんなからされたり、何度も繰り返されたりすると、そうされた人はどうしてよいかかわらずにとても苦しい思いをしたり、みんなの前で恥ずかしい目にあわされてつらい思いをしたりします。

これから皆さんに質問するのは、そうしたいじわるやイヤなことを、むりやりされた体験や、反対に弱い立場の友だちにあなたがした体験についてです。

問5 いじわるやイヤなことには、いろいろなものがあります。あなたは、新学期になってから学校の友だちのだれかから、次のようなことをどのくらいされましたか。ア～カのそれぞれについて、一番近いと思う数字に、一つずつ○をつけてってください。

	1 週 間 に 何 度 も	1 週 間 に 1 回 く ら い	2 〜 3 回 く ら い	1 か 月 に く ら い	1 今 ま で 2 回 く ら い	ぜ ん ぜ ん な か っ た
ア. 仲間はずれにされたり、無視されたり、陰で悪口を言われたりした	1	2	3	4	5	
イ. からかわれたり、悪口やおどし文句、イヤなことを言われたりした	1	2	3	4	5	
ウ. 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりした	1	2	3	4	5	
エ. ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりした	1	2	3	4	5	
オ. お金や物を盗られたり、壊されたりした	1	2	3	4	5	
カ. パソコンや携帯電話で、イヤなことをされた	1	2	3	4	5	

問5ア. いじめ被害：仲間はずれ・無視・陰口

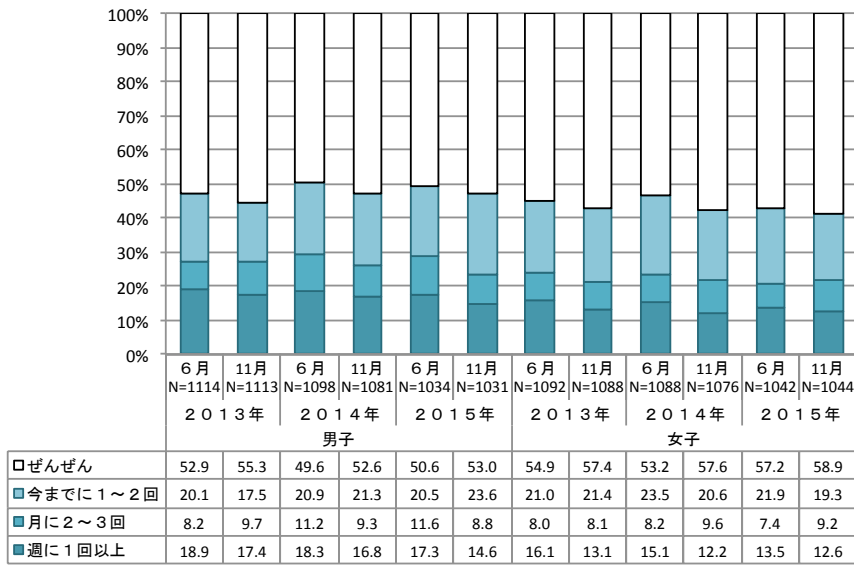


○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は男女とも2014年夏に高かったことが分かります。「週に1回以上」という頻度の高い加害に着目すると、男子は2014年夏、女子は2015年夏が高かったと言えます。

問5イ. いじめ被害：からかう・悪口

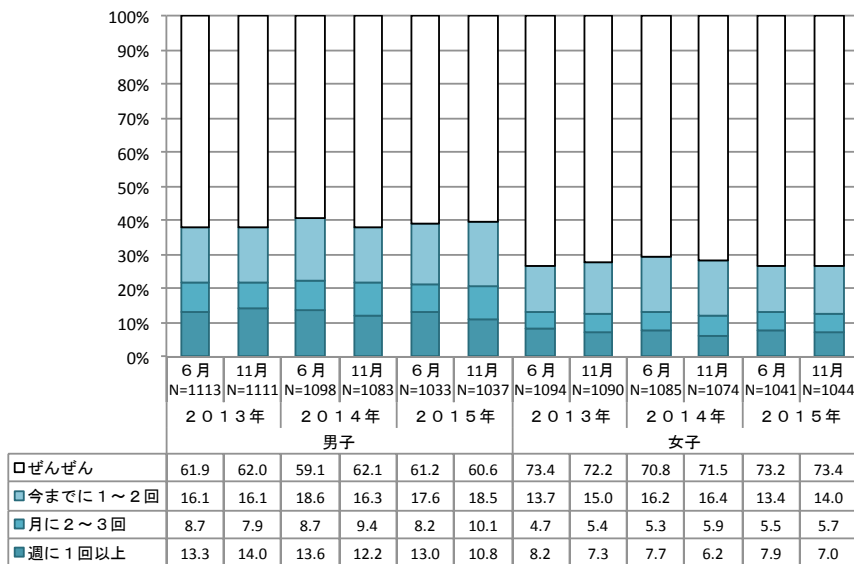


○からかう・悪口

男女共に被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、男女共2014年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い被害に着目すると、男女共2013年夏が高かったと言えます。

問5ウ. いじめ被害：軽くぶつかる・叩く・蹴る



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、海外では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

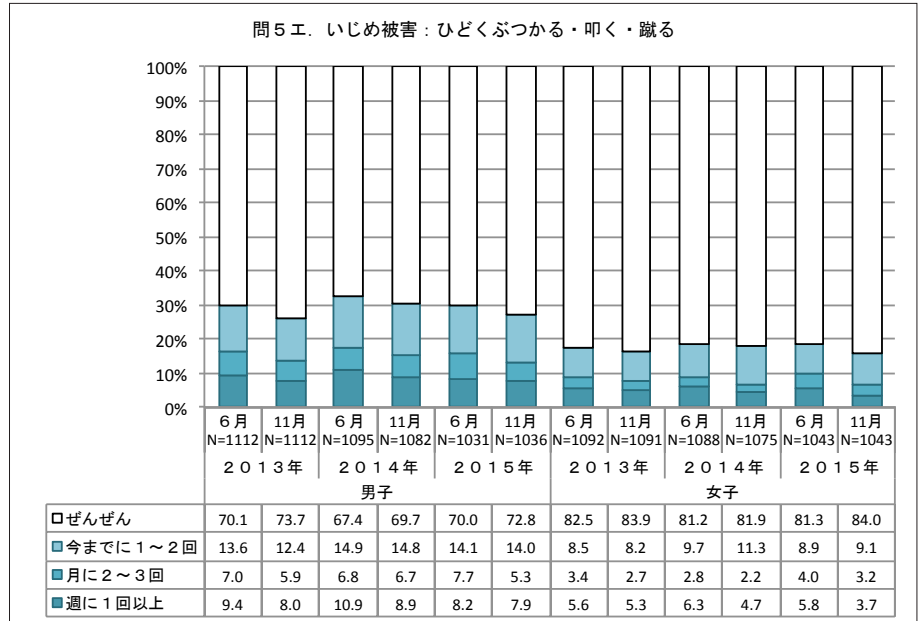
男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は男女共2014年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い被害に着目すると、男子は2013年秋、女子は2013年夏が高かったと言えます。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男女共に被害経験率は低いほうですが、男子に多い傾向が窺えます。

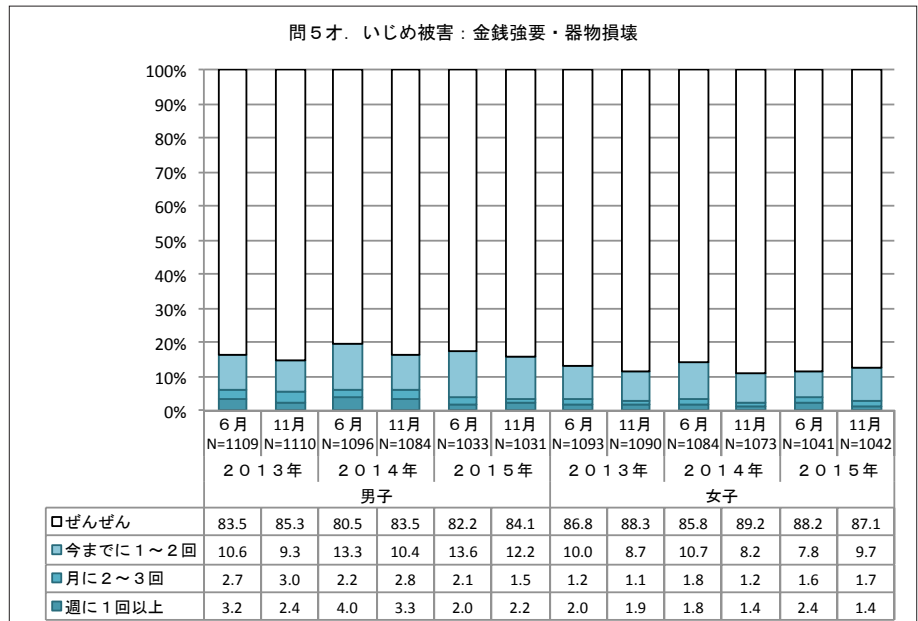
この3年間に大きな変動はありませんが、全体の被害は男女共2014年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い被害に着目すると、男女共2014年夏が高かったと言えます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に被害経験率は低いほうの項目ですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

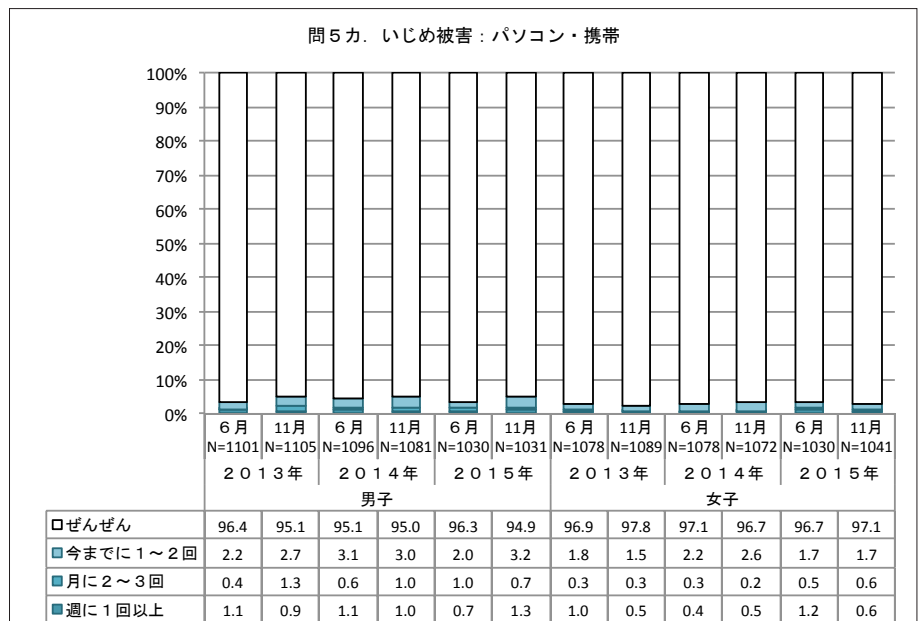
この3年間に、大きな変動はありませんが、男女共2014年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い被害に着目すると、男子は2014年夏、女子は2013年夏が高かったと言えます。



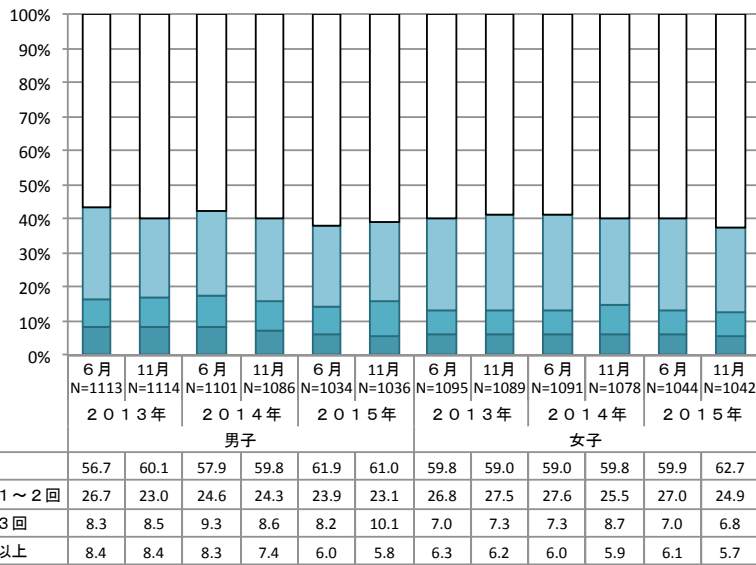
○パソコン・携帯

男女共に、最も被害経験率が低い行為です。

この3年間に大きな変動はありません。



問6ア. いじめ加害：仲間はずれ・無視・陰口

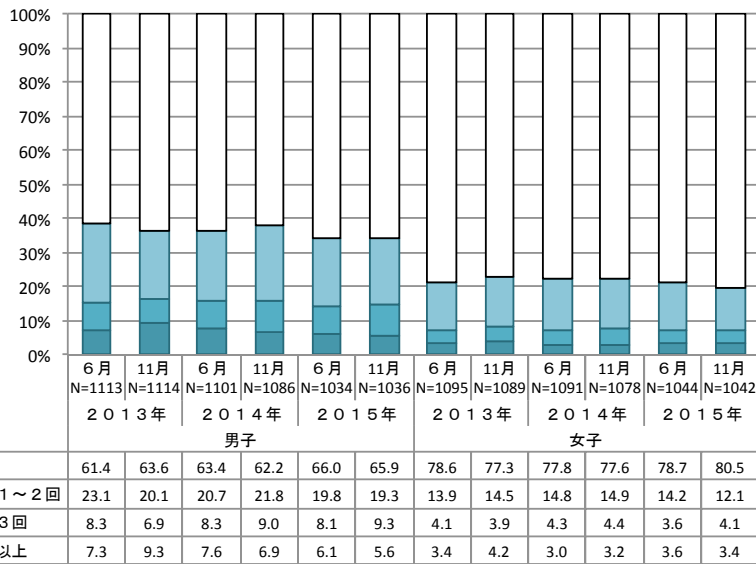


○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に加害経験率は高いです。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2013年夏、女子では2013年秋と2014年の夏が相対的に高かったことがわかります。頻度の高い加害に着目すると、男子は2013年夏と秋、女子は2013年夏が高かったと言えます。

問6イ. いじめ加害：からかう・悪口

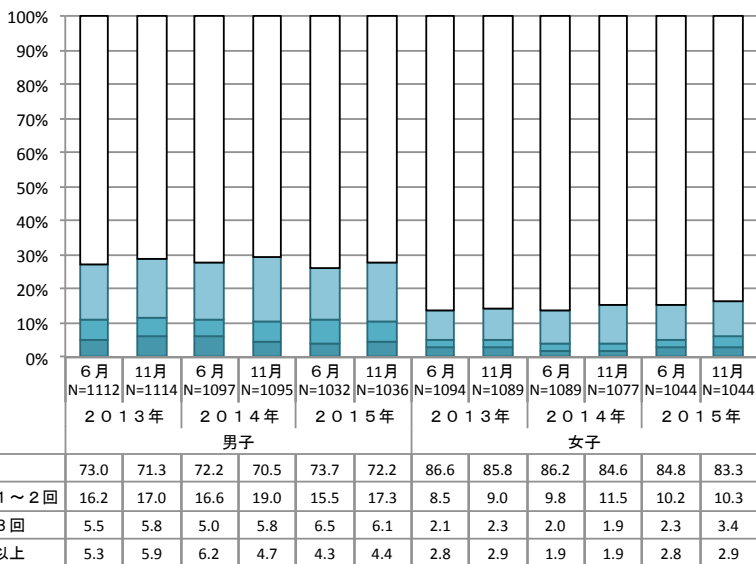


○からかう・悪口

男女共に加害経験率は高いほうですが、男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2013年夏、女子では2013年秋が相対的に高かったことがわかります。頻度の高い加害に着目すると、男女共に2013年秋が高かったと言えます。

問6ウ. いじめ加害：軽くぶつかる・叩く・蹴る



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

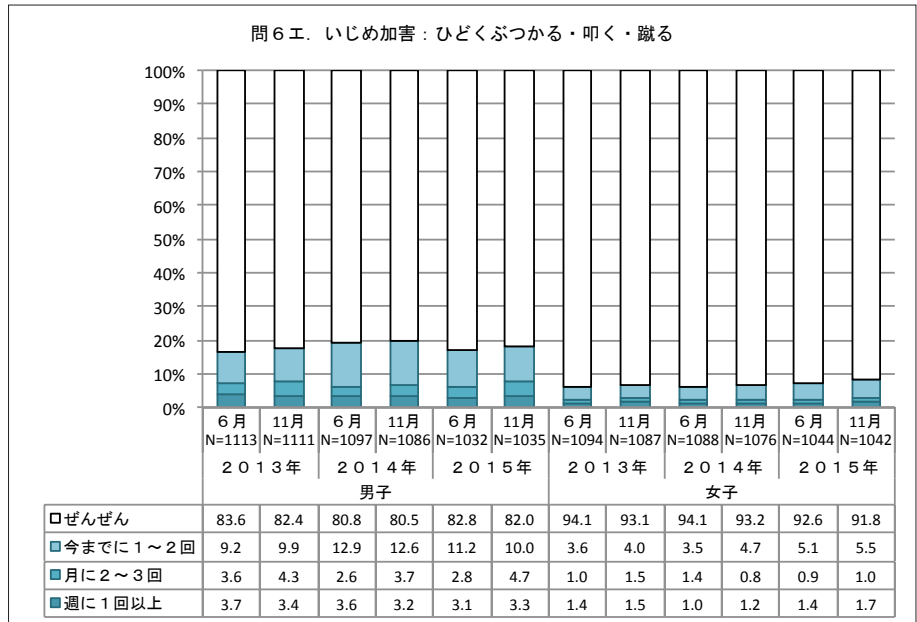
男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2014年秋、女子は2015年秋が相対的に高かったことがわかります。頻度の高い加害は、男子は2014年夏、女子は2013年と2015年秋が高かったと言えます。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男女共に加害経験率は低いほうですが、男子に多い傾向が窺えます。

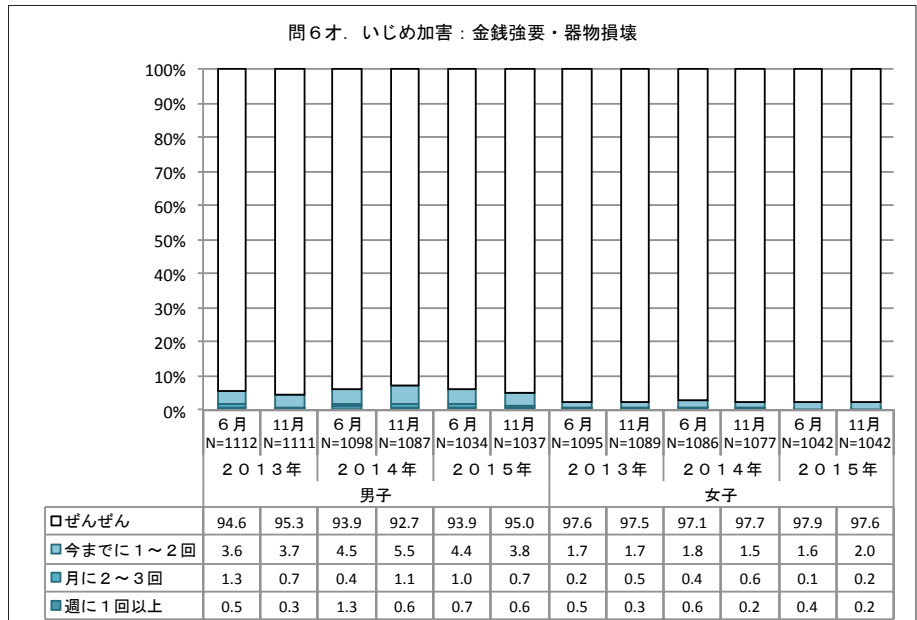
この3年間に大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2014年秋、女子では2015年秋が相対的に高かったことがわかります。頻度の高い加害に着目しても、男子では2014年秋、女子では2015年秋が高かったと言えます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に加害経験率は低い項目ですが、男子に多い傾向が窺えます。

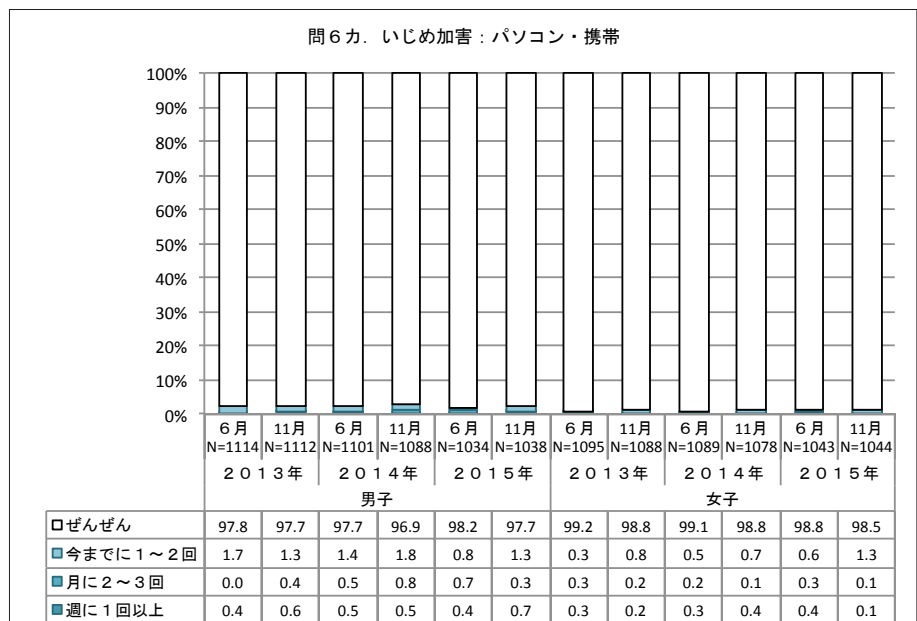
この3年間に、大きな変動はありません。



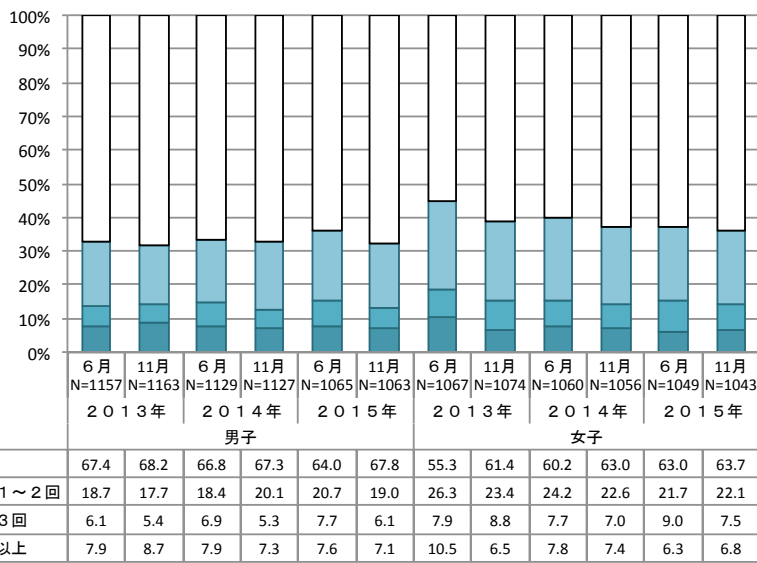
○パソコン・携帯

男女共に、最も加害経験率が低い行為です。

この3年間に大きな変動はありません。



問5ア. いじめ被害：仲間はずれ・無視・陰口

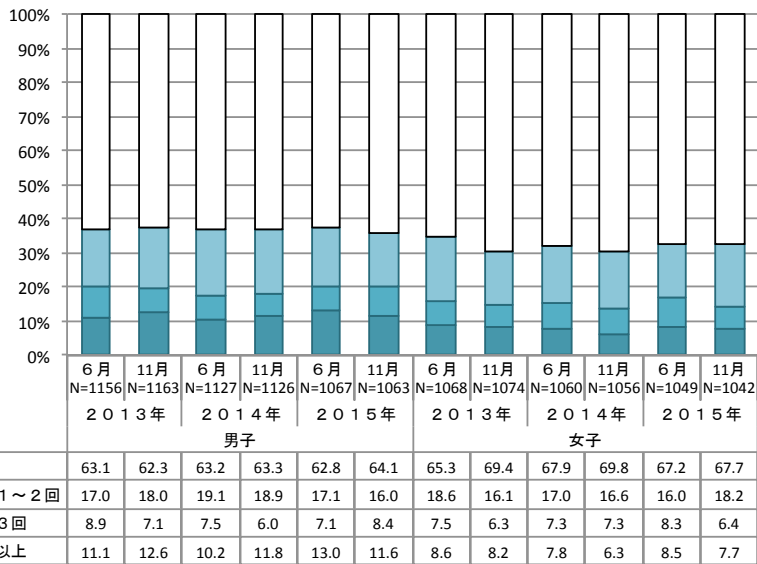


○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は男子では2015年夏、女子では2013年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い加害に着目すると、男子は2013年秋、女子は2013年夏が高かったと言えます。

問5イ. いじめ被害：からかう・悪口

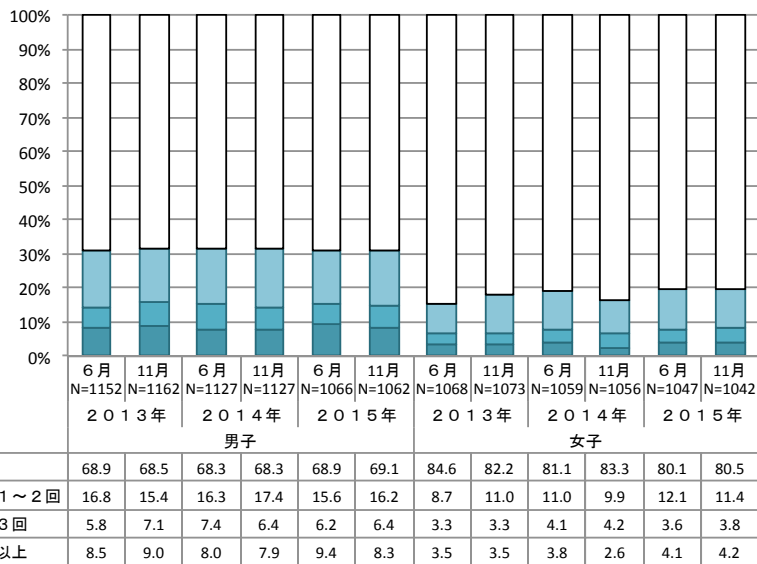


○からかう・悪口

男女共に被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、男女共に2013年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い加害に着目すると、男子は2015年夏、女子は2013年夏が高かったと言えます。

問5ウ. いじめ被害：軽くぶつかる・叩く・蹴る



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、海外では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

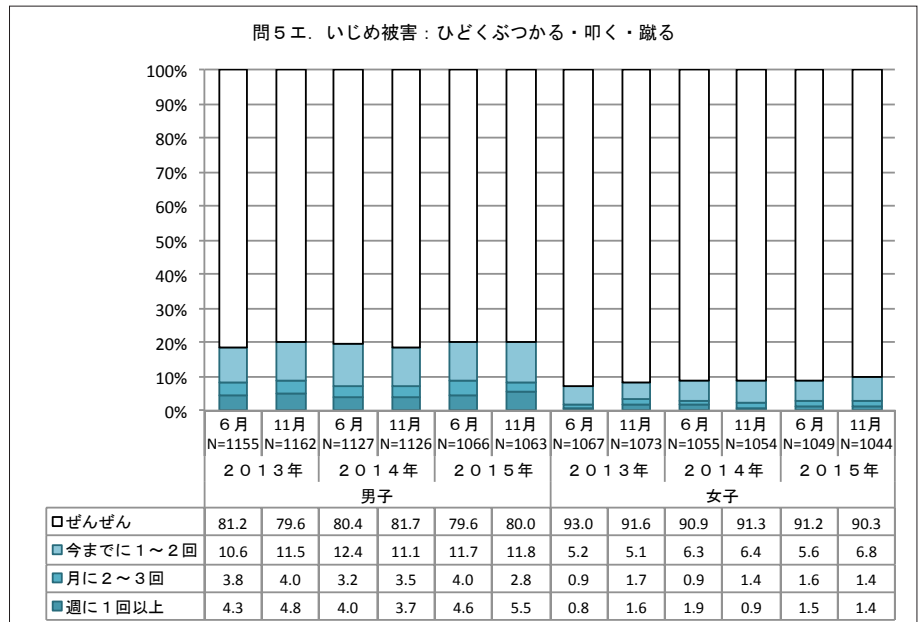
男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、男子では全体の被害は2014年夏秋、女子では2015年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い被害は2015年夏、女子では2015年秋が相対的に高かったことが分かります。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男女共に被害経験率は低いほうですが、男子に多い傾向が窺えます。

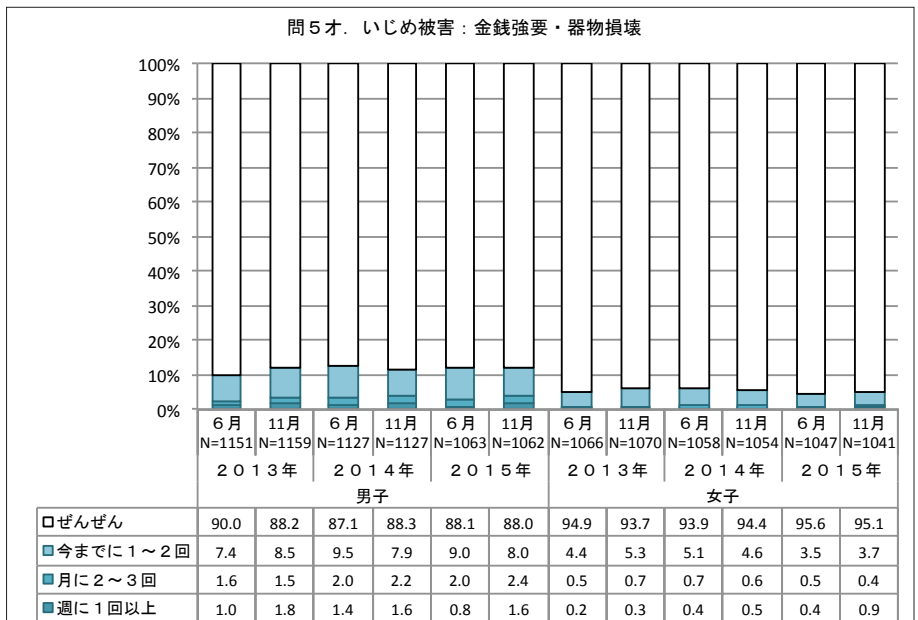
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は男子では2013年秋と2015年夏、女子では2015年秋が相対的に高かったことがわかります。頻度の高い加害に着目すると、男子は2013年秋、女子は2014年夏が高かったと言えます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に加害経験率は低い項目ですが、男子に多い傾向が窺えます。

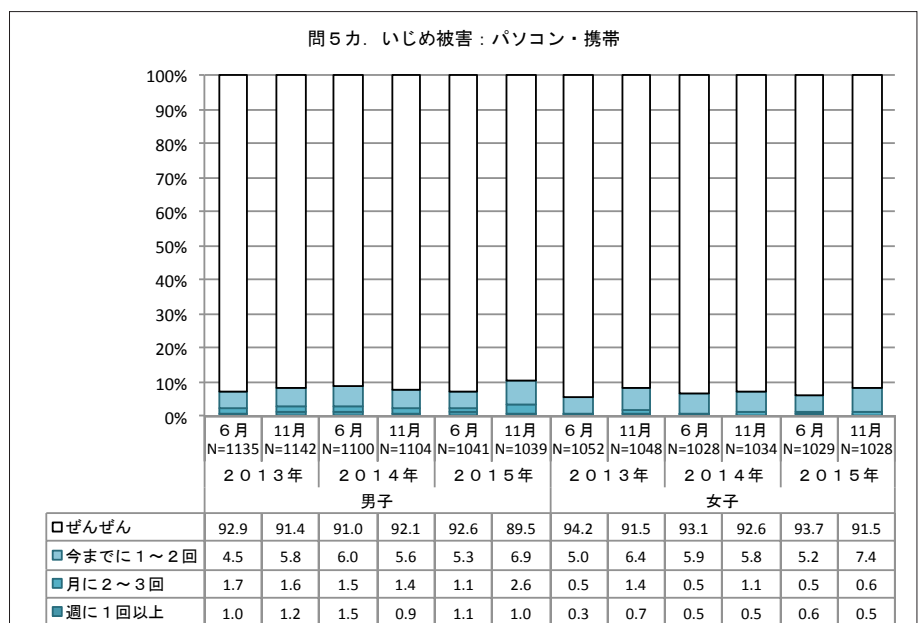
この3年間に、大きな変動はありません。



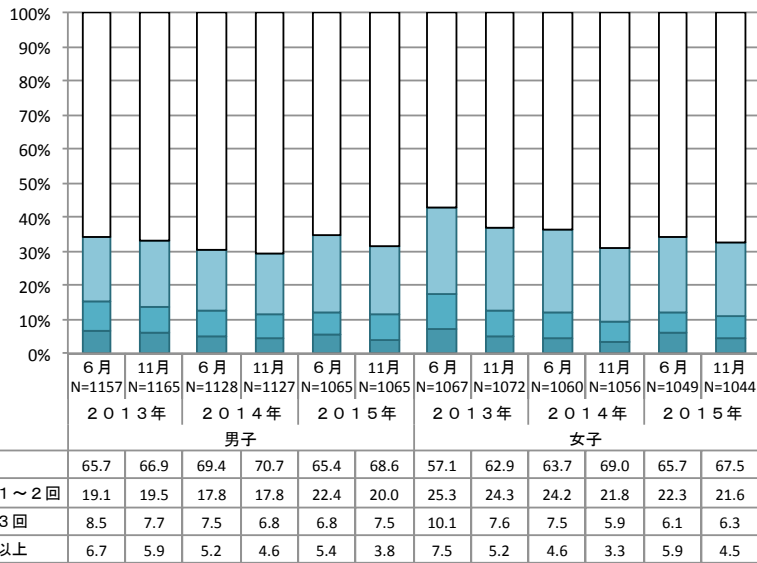
○パソコン・携帯

男女共に、最も加害経験率が低い行為です。

この3年間に大きな変動はありません。



問6ア. いじめ加害：仲間はずれ、無視、陰口

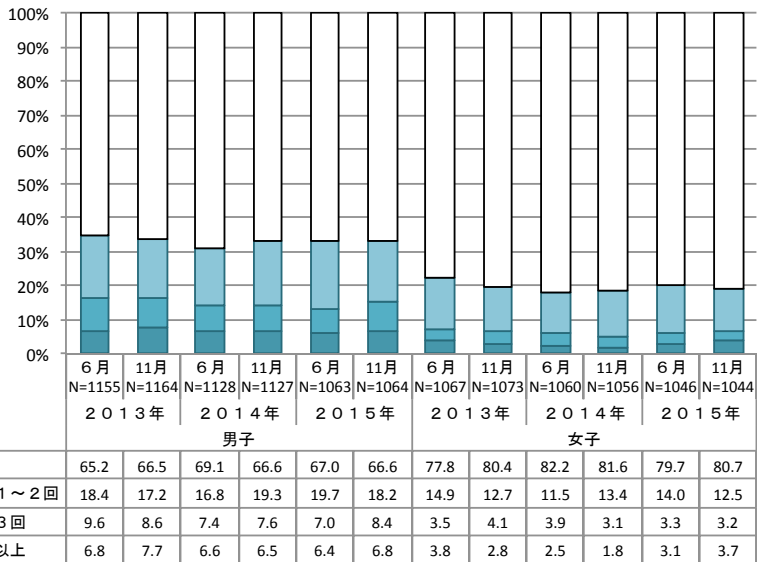


○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に加害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2015年夏が、女子では2013年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い加害に着目すると、男女共に2013年夏が高かったと言えます。

問6イ. いじめ加害：からかう・悪口

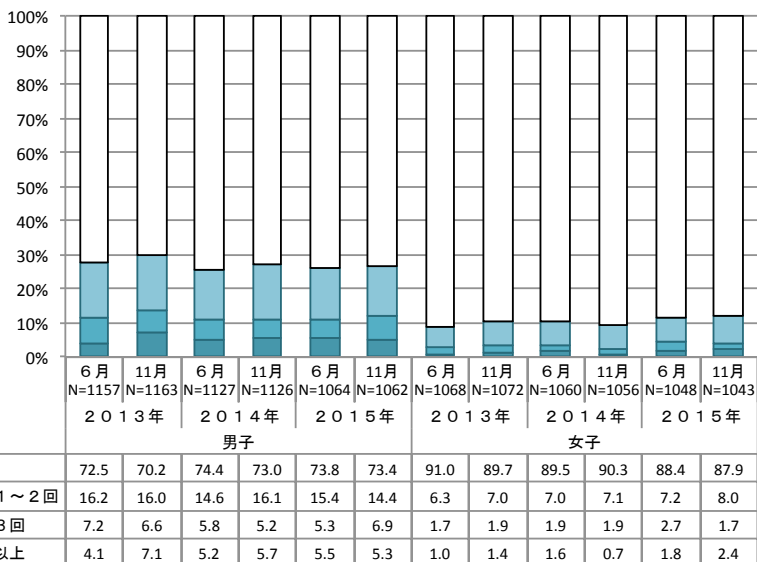


○からかう・悪口

男女共に加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男女共に2013年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い加害に着目すると、男子では2013年秋、女子では2013年夏が高かったと言えます。

問6ウ. いじめ加害：軽くぶつかる・叩く・蹴る



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、海外では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

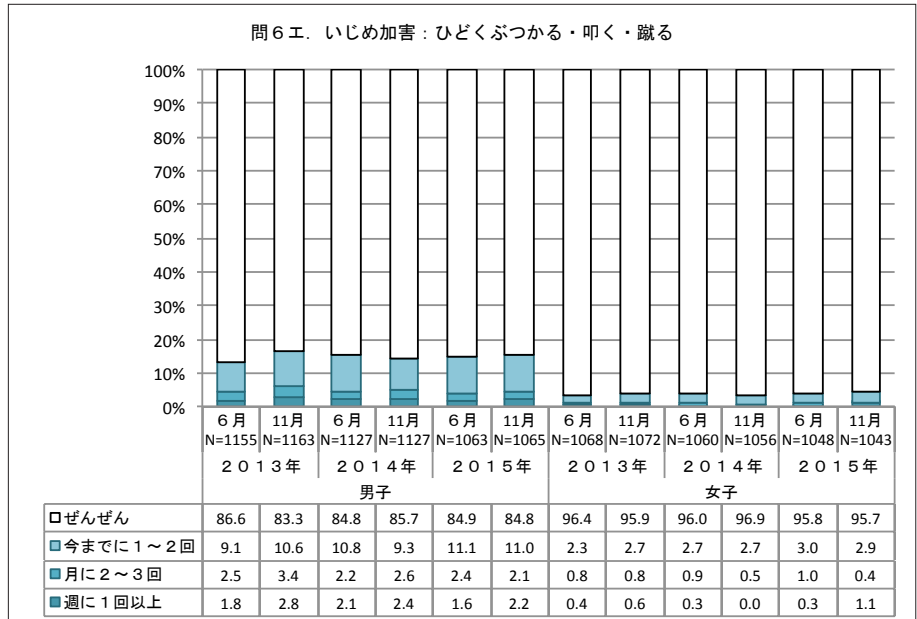
男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体でも頻度の高い加害に着目しても男子では2013年秋、女子では2015年秋が相対的に高かったことが分かります。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男女共に加害経験率は低いほうですが、男子に多い傾向が窺えます。

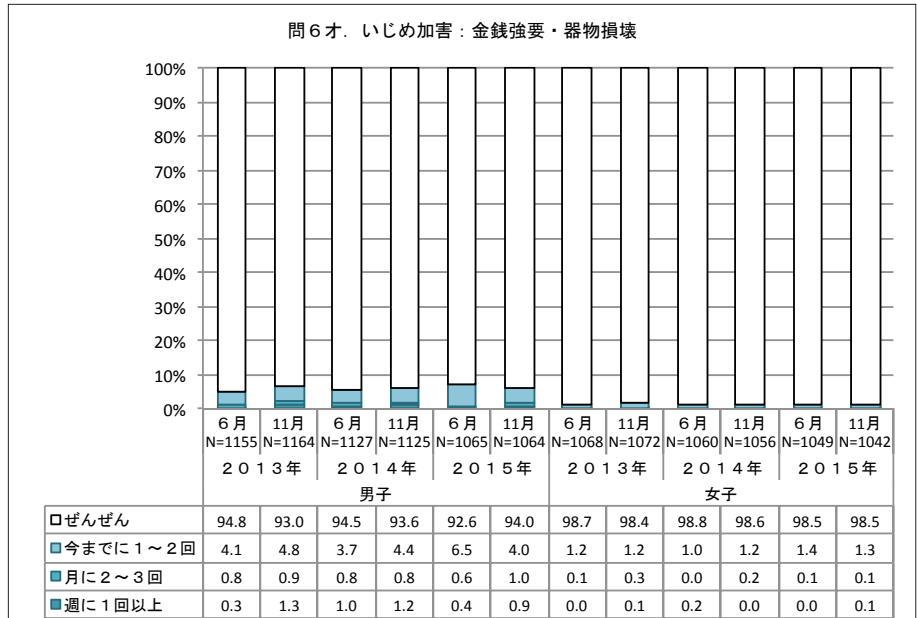
この3年間に大きな変動はありませんが、全体でも頻度の高い加害に着目しても男子では2013年秋、女子では2015年秋が相対的に高かったことが分かります。



○金銭強要・器物損壊

男女共に加害経験率は低い項目ですが、男子に多い傾向が窺えます。

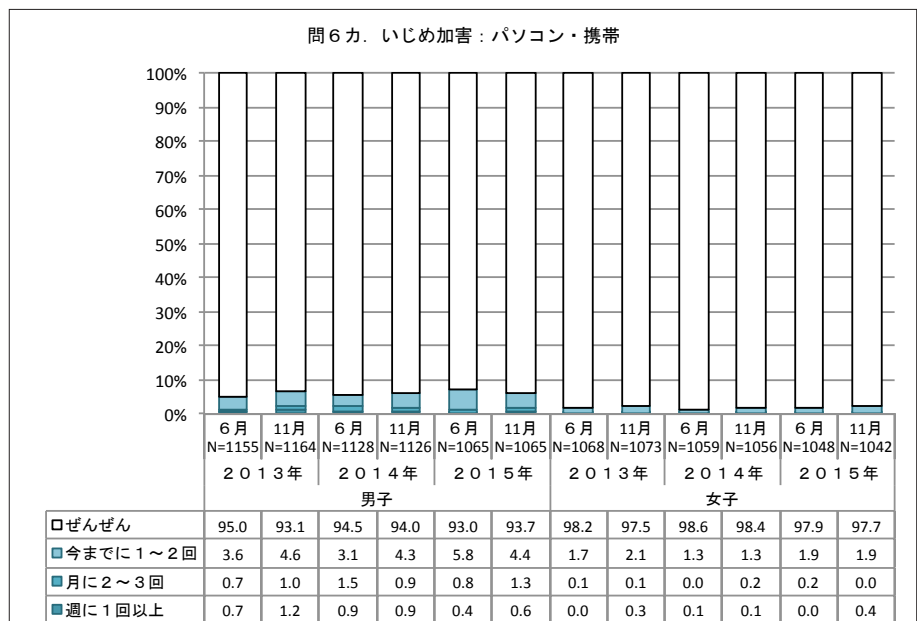
この3年間に、大きな変動はありません。

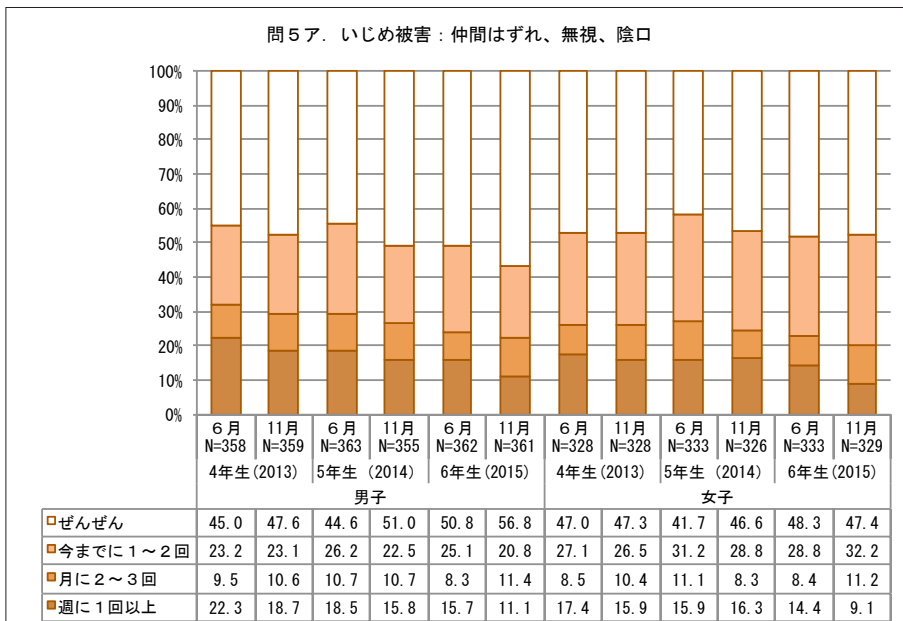


○パソコン・携帯

男女共に、最も加害経験率が低い行為です。

この3年間に大きな変動はありません。

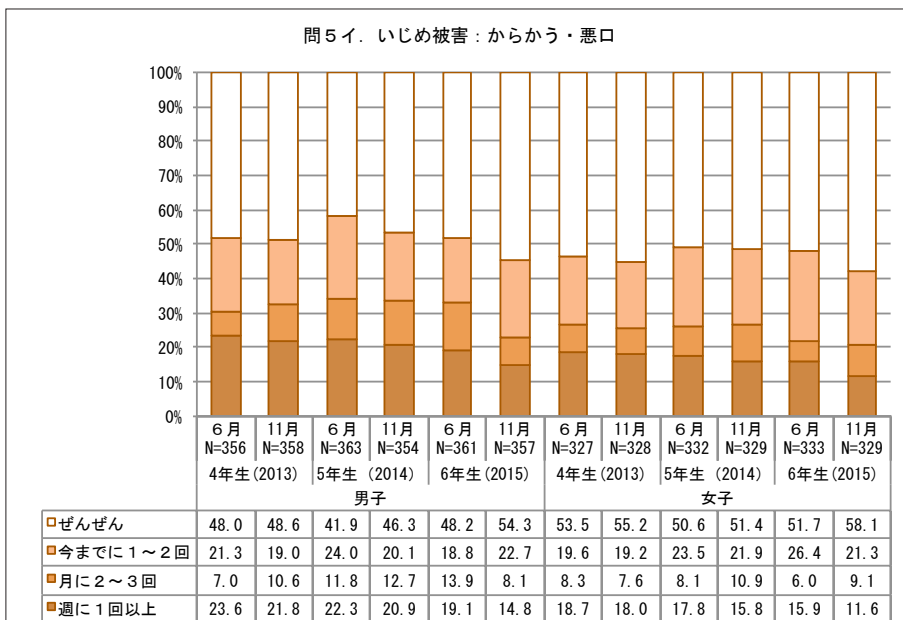




○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

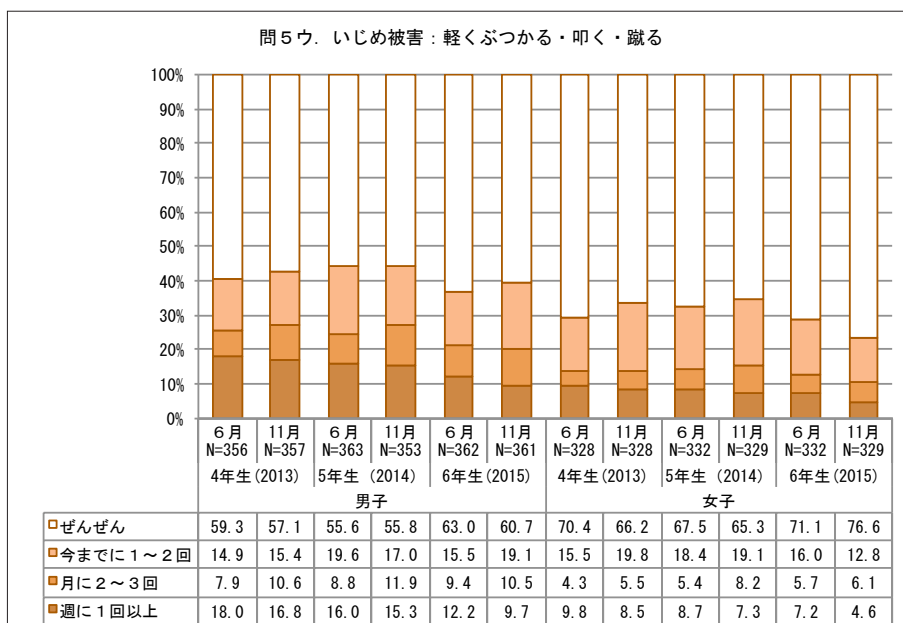
男子は4~5年生がピークでその後は減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。



○からかう・悪口

男女共に被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

男女共に5年生がピークで、6年生にかけてやや減少します。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

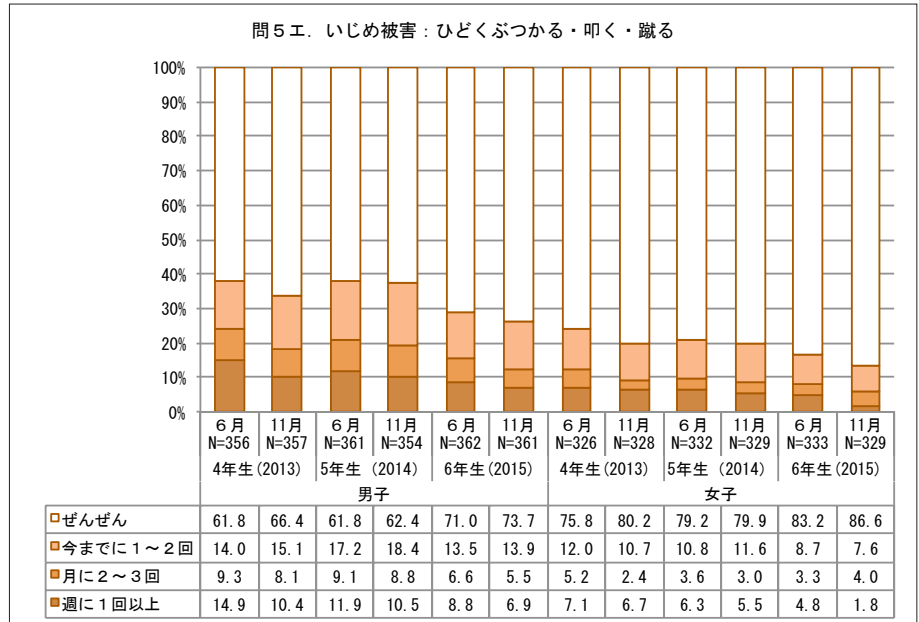
やや男子に多い傾向が窺えます。

男子は4年生から5年生で増える傾向が窺えます。女子は4~5年生がピークの後、減る傾向が窺えます。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の被害経験率が高い傾向が
うかがえます。

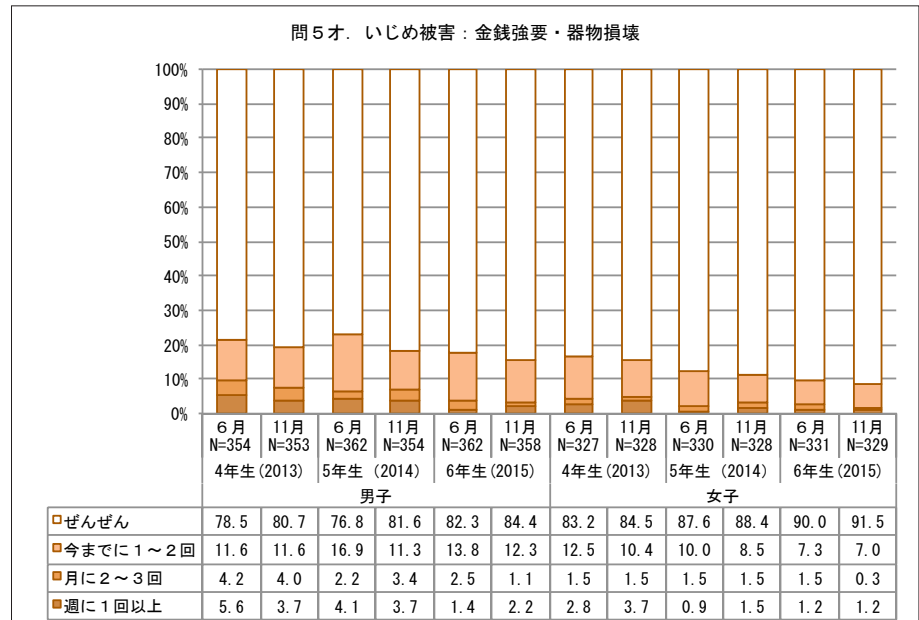
男女共に4年生がピークで、
6年生になると減少する傾向が
うかがえます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に被害経験率は低いですが、
男子に多い傾向がうかがえます。

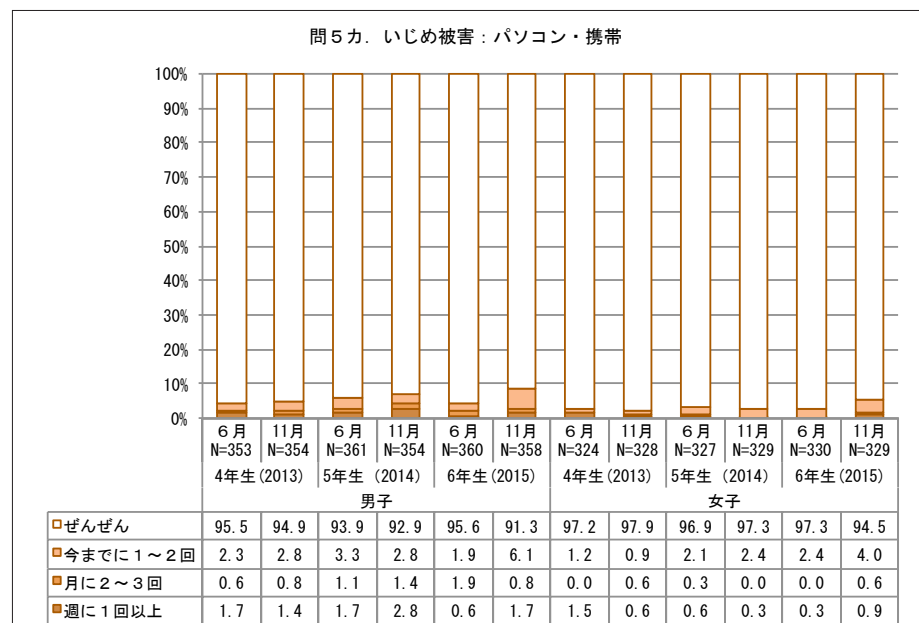
男子では6年生から、女子では5年生から減少する傾向が
うかがえます。

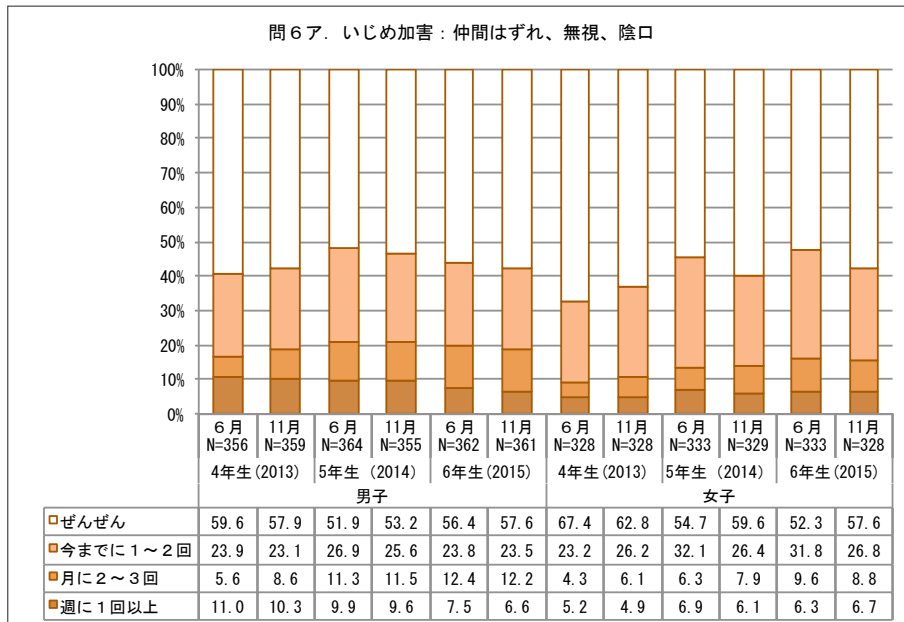


○パソコン・携帯

男女共に、最も被害経験率が低い行為です。

学年進行に伴うはっきりした傾向は
うかがえませんが、5～6年生で
やや高いと言えます。

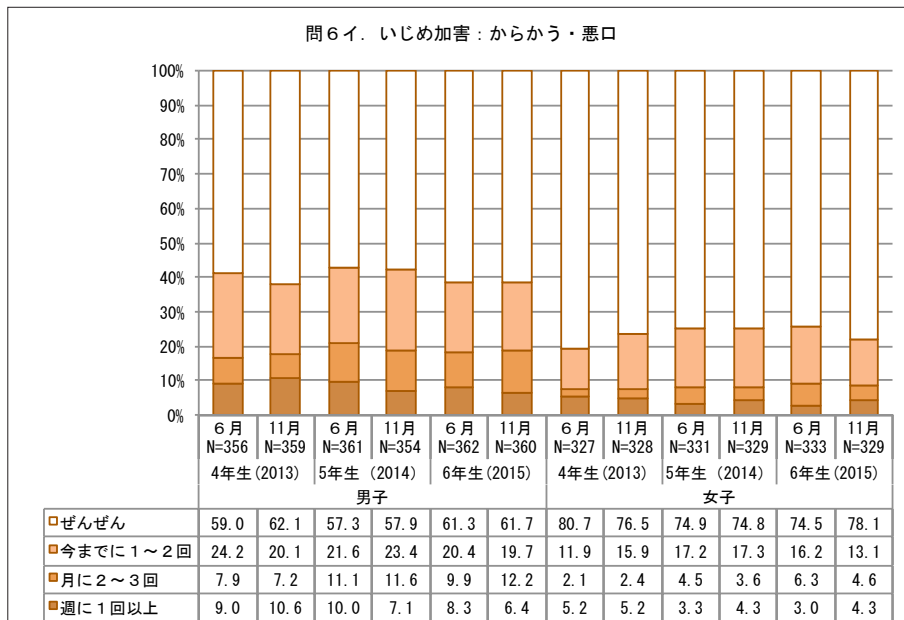




○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に加害経験率は高いです。

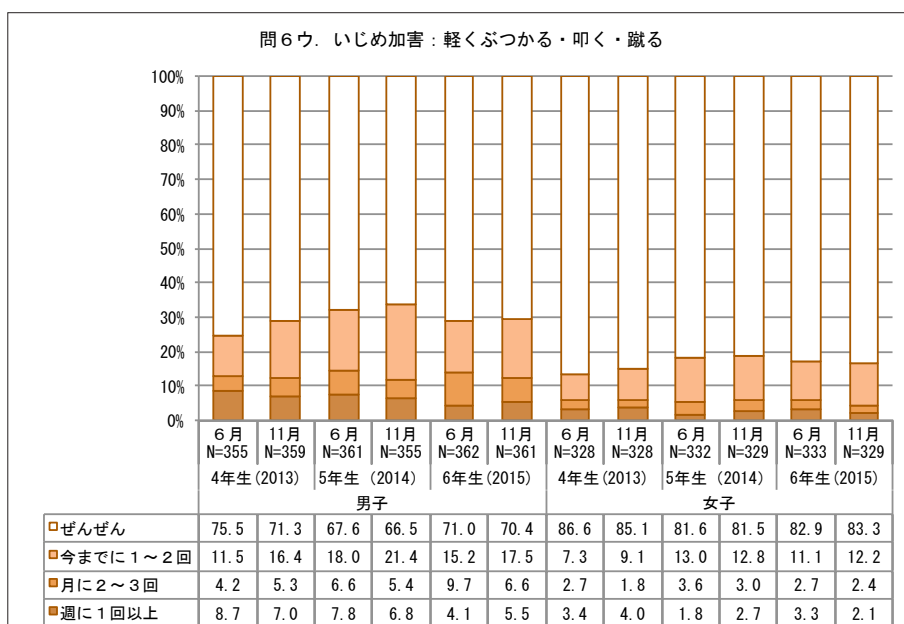
男子は5年生がピークで6年生でわずかに減る傾向が窺えますが、女子は5~6年生がピークになります。



○からかう・悪口

男女共に加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。

男子は4~5年生が高く、女子は5~6年生で高い傾向が窺えます。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

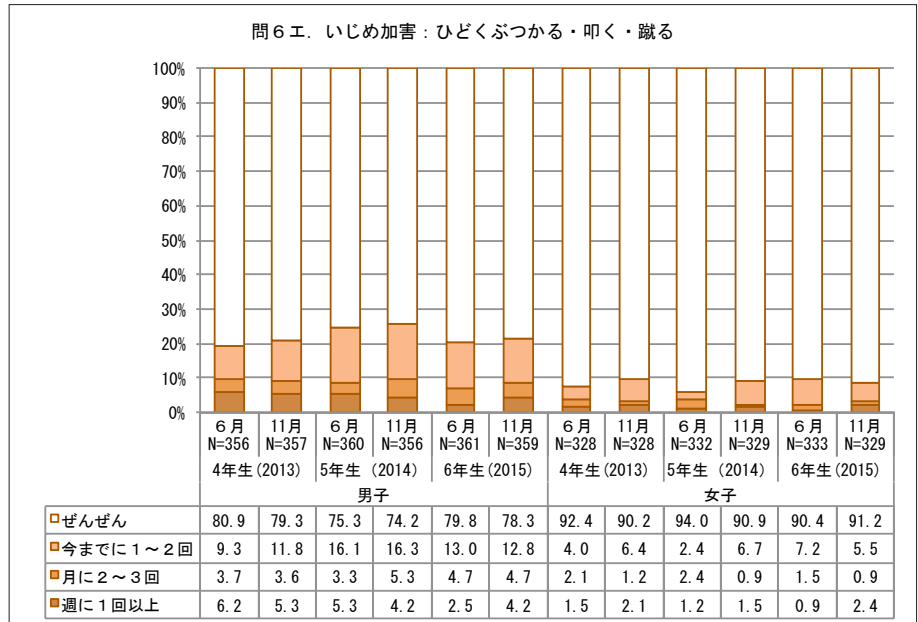
男子に多い傾向が窺えます。

男女共に5年生がピークで6年生にやや減る傾向が窺えます。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の加害経験率が高い傾向が
うかが
見えます。

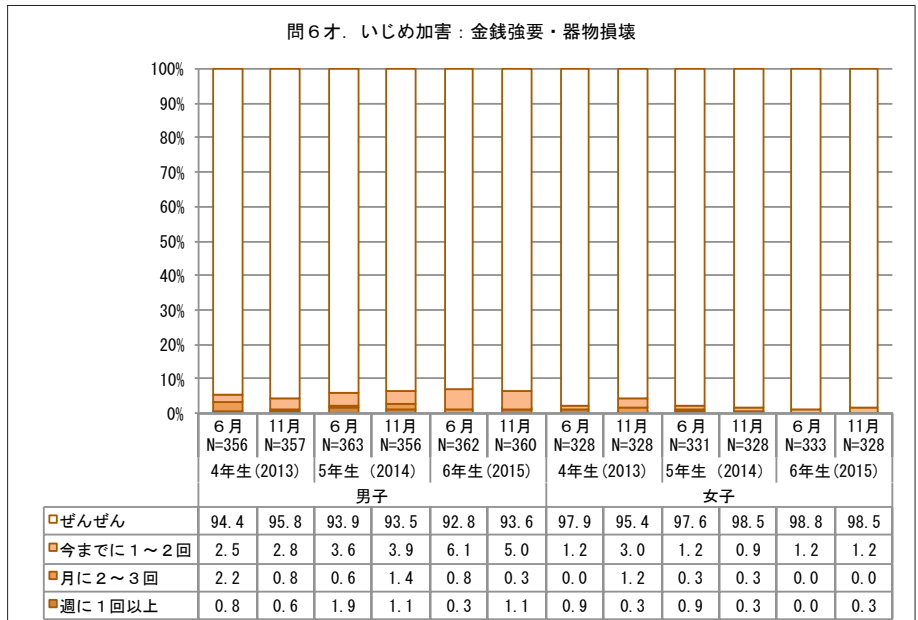
男子では5年生がピーク、女
子は大きくは変わりません。



○金銭強要・器物損壊

男女共に加害経験率は低いですが、やや男子に多い傾向が
うかが
見えます。

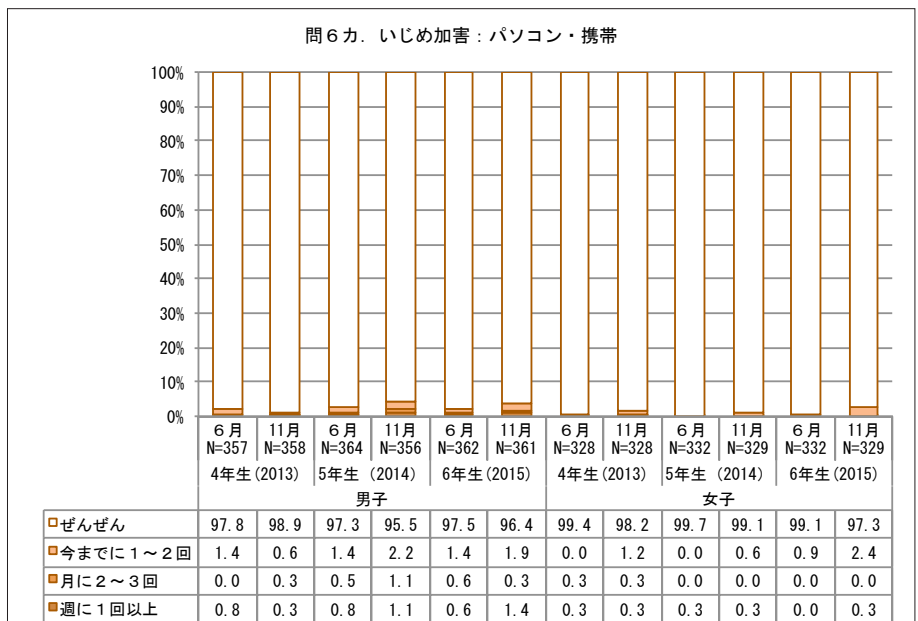
学年進行に伴うはっきりした傾
向は
うかが
見られません。

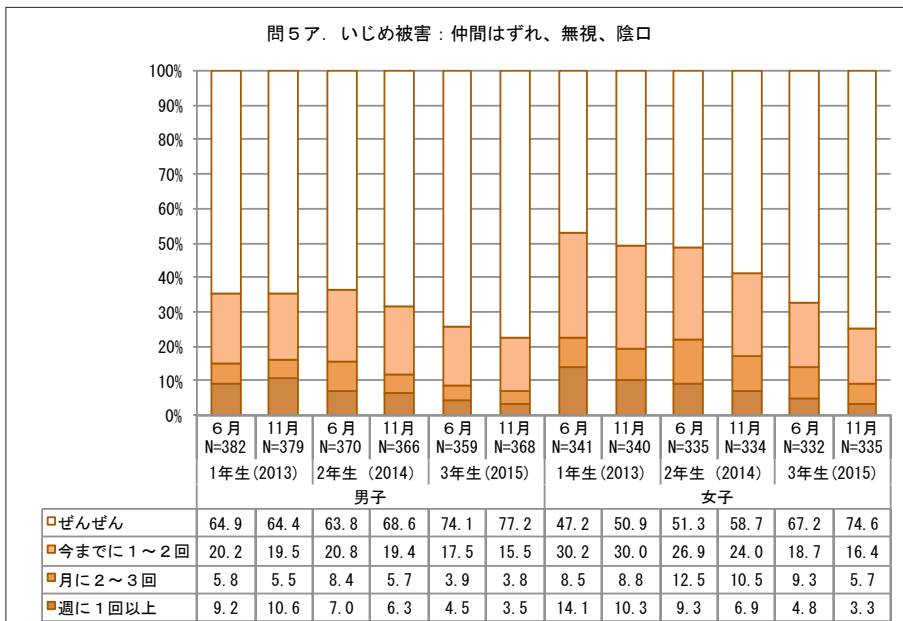


○パソコン・携帯

男女共に、最も加害経験率が低
い行為です。

学年進行に伴うはっきりした傾
向は
うかが
見られません。

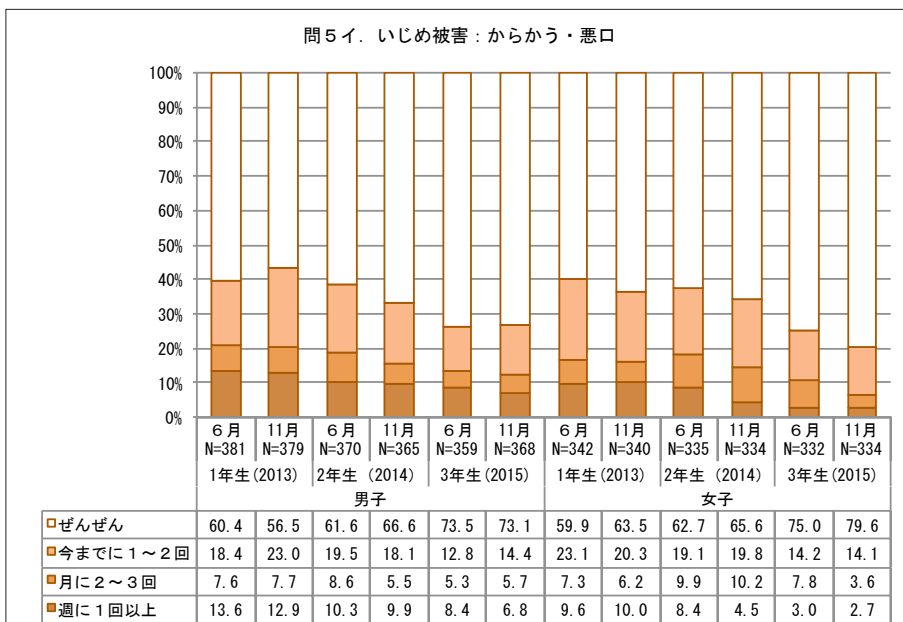




○仲間はずれ・無視・陰口

男女ともに経験率は高いですが、女子に多い傾向が窺えます。

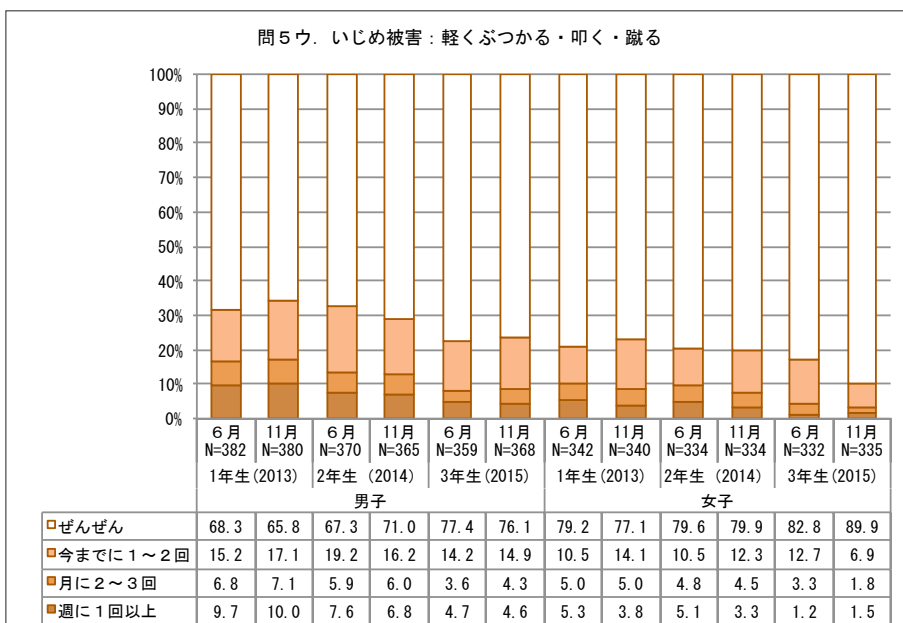
男子は2年生秋から、女子では1年生秋から減少していく傾向が窺えます。



○からかう・悪口

男女ともに経験率は高いです。

男子は2年生夏から、女子では1年生秋から減少していく傾向が窺えます。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

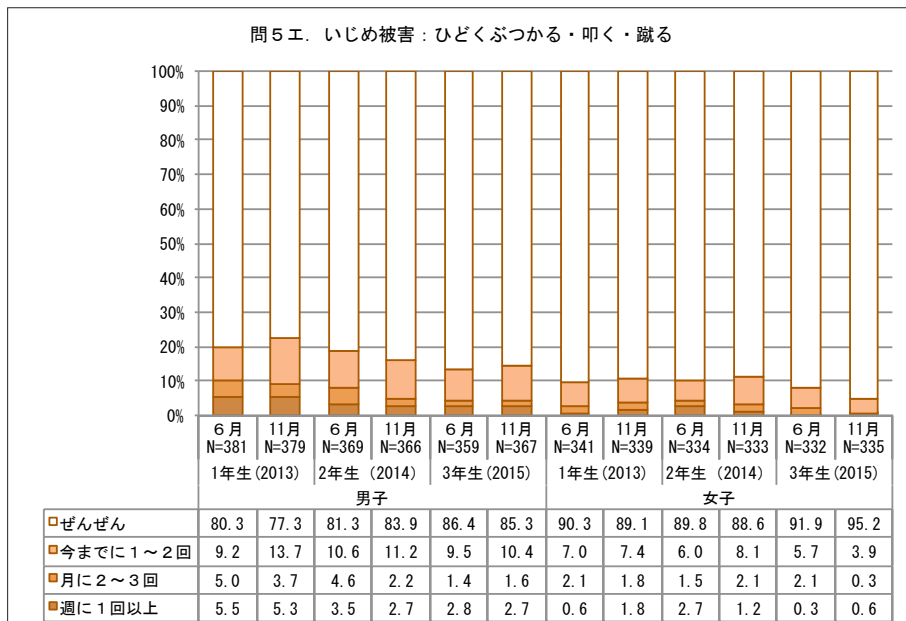
男子に多い傾向が窺えます。

男女共に2年生夏から減少していく傾向が窺えます。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の加害経験率が高い傾向が
窺えます。

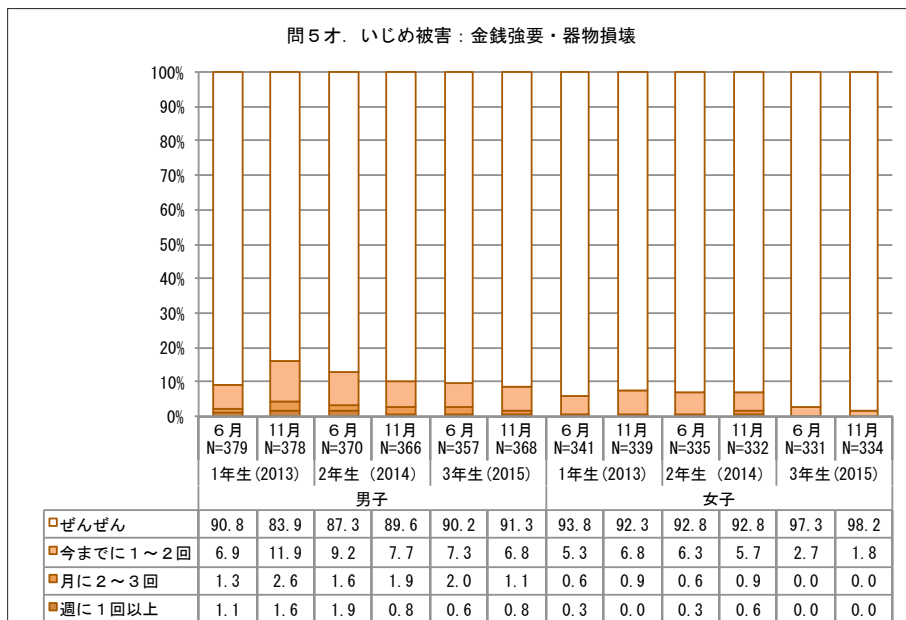
男女共に2年生夏から減少し
ていく傾向が窺えます。



○金銭強要・器物損壊

男女ともに経験率は低いですが、
やや男子に多い傾向が窺えます。

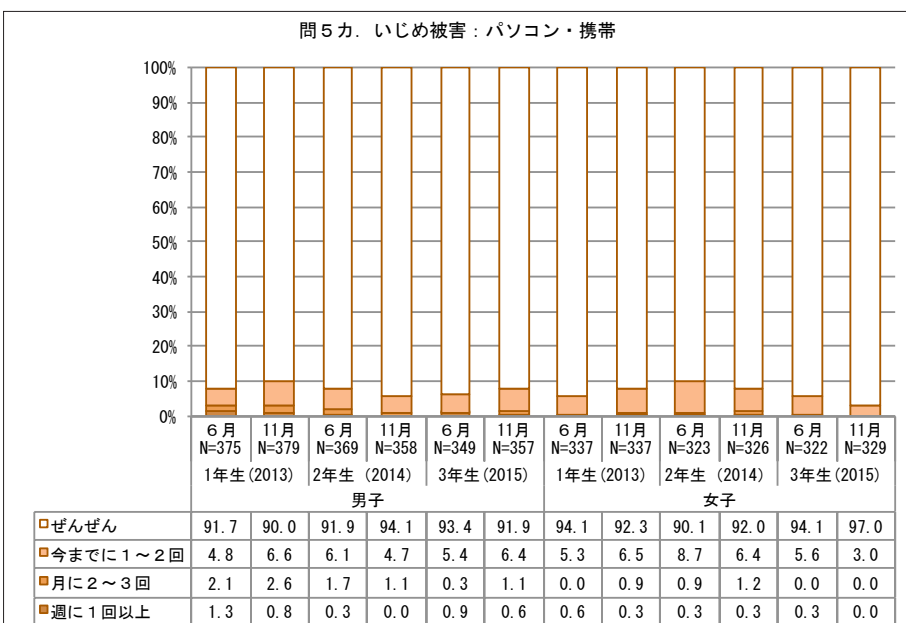
男子では2年生から、女子では
3年生から減少する傾向が窺えます。



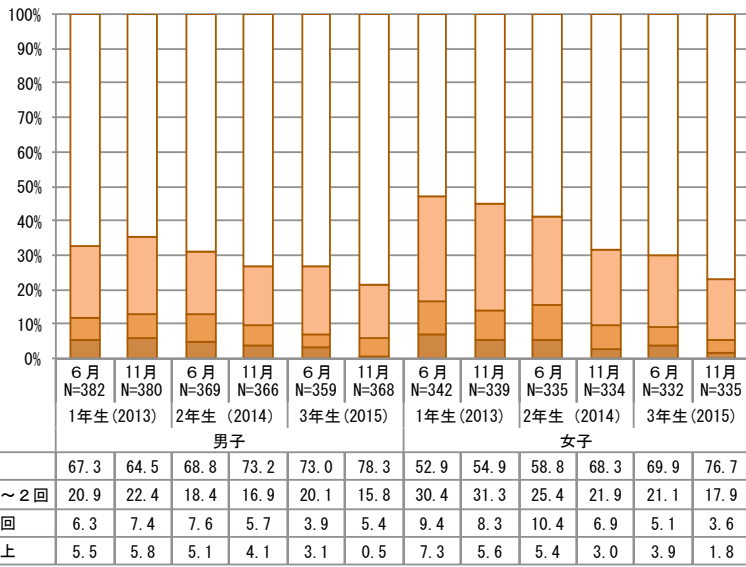
○パソコン・携帯

男女ともに、経験率は低い行為
です。

学年進行に伴うはっきりした傾
向は窺えませんが、3年生は低い
と言えます。



問6ア. いじめ加害：仲間はずれ、無視、陰口

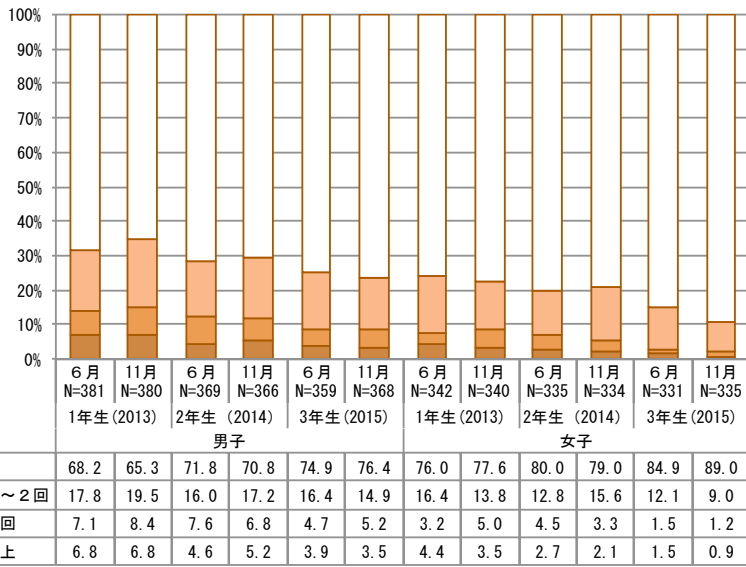


○仲間はずれ・無視・陰口

男女ともに経験率は高いですが、女子に多い傾向が窺えます。

男子は、1年生をピークに減少傾向が窺えます。女子は1年生秋から減少していきます。

問6イ. いじめ加害：からかう・悪口

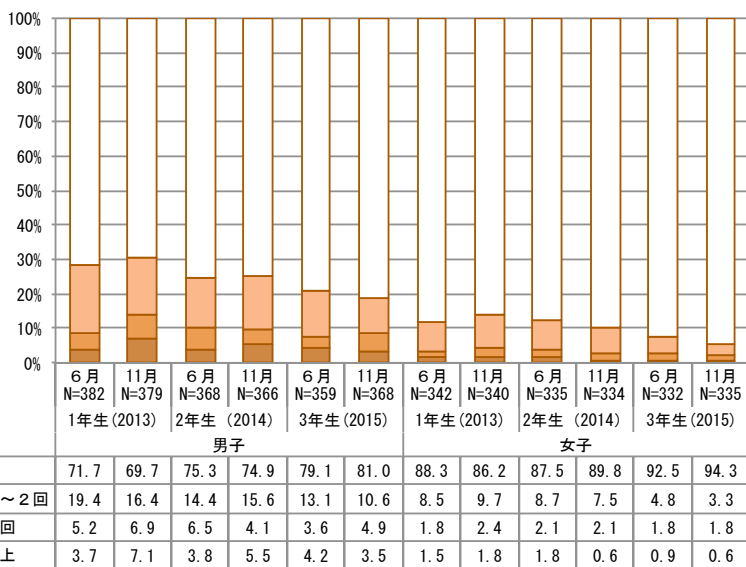


○からかう・悪口

男女ともに経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。

男子は、1年生をピークに減少傾向が窺えます。女子は1年生秋から減少していきます。

問6ウ. いじめ加害：軽くぶつかる・叩く・蹴る



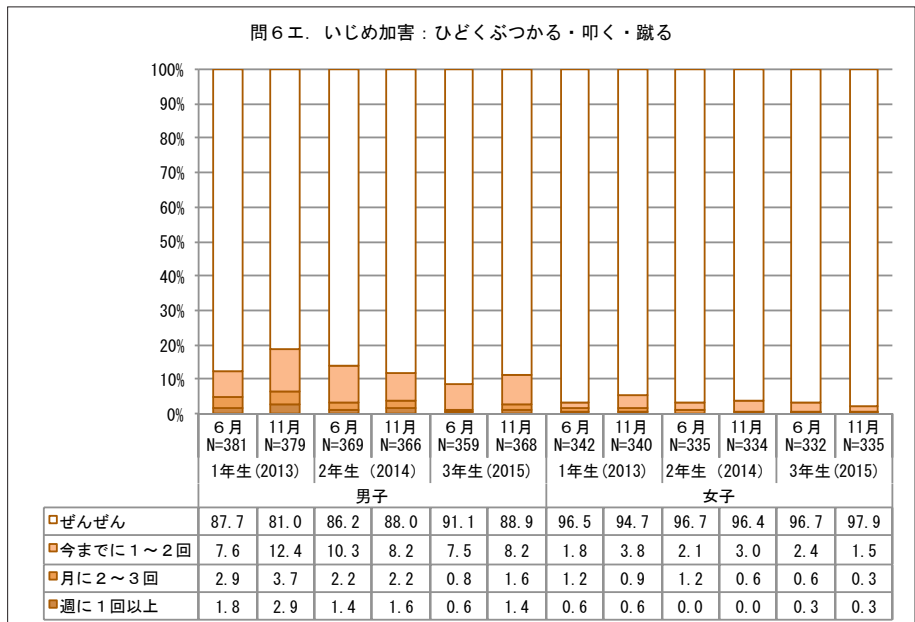
○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

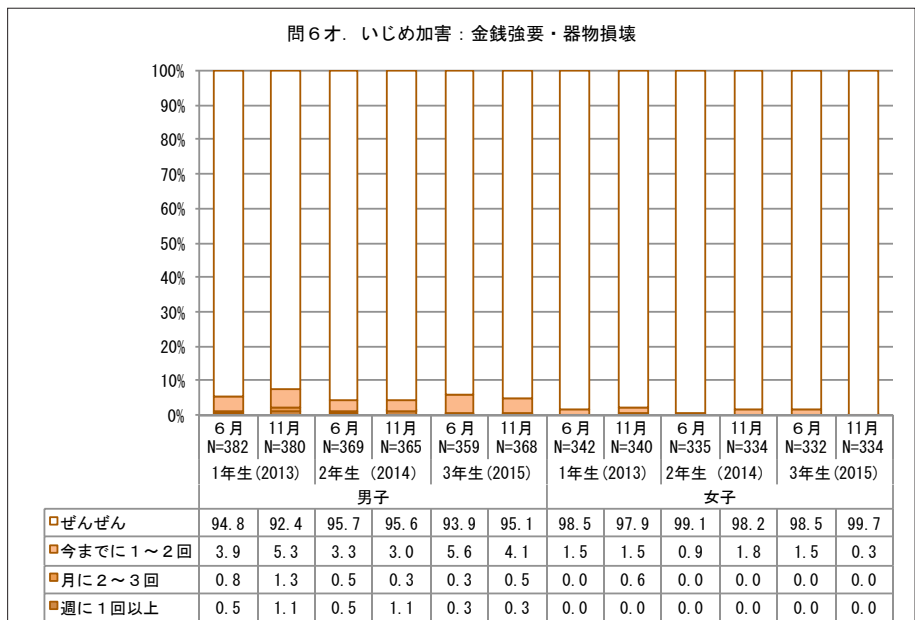
男子に多い傾向が窺えます。

男女共に1年生をピークに減少傾向が窺えます。

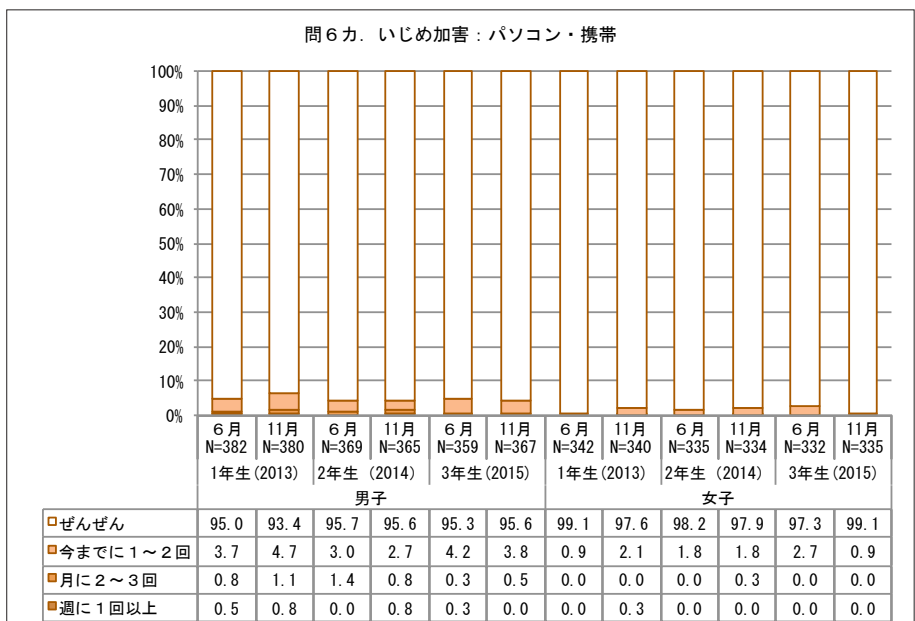
○ひどくぶつかる・叩く・蹴る
 男子に多い傾向が窺えます。
 1年生にやや多い傾向があります。



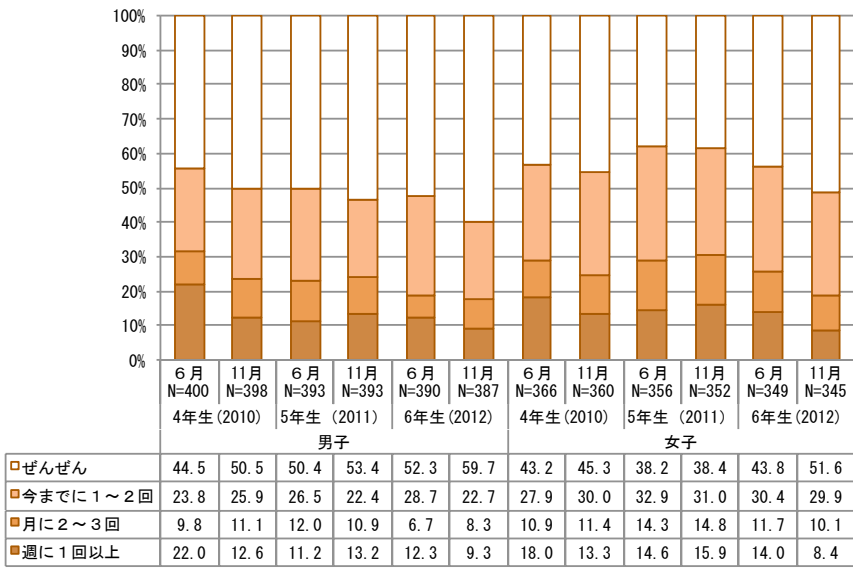
○金銭強要・器物損壊
 男女ともに経験率は低いですが、男子に多い傾向が窺えます。
 学年進行に伴うはっきりした傾向は窺えません。



○パソコン・携帯
 男女ともに、経験率は低い行為です。
 学年進行に伴うはっきりした傾向は窺えません。



問5ア. いじめ被害：仲間はずれ、無視、陰口

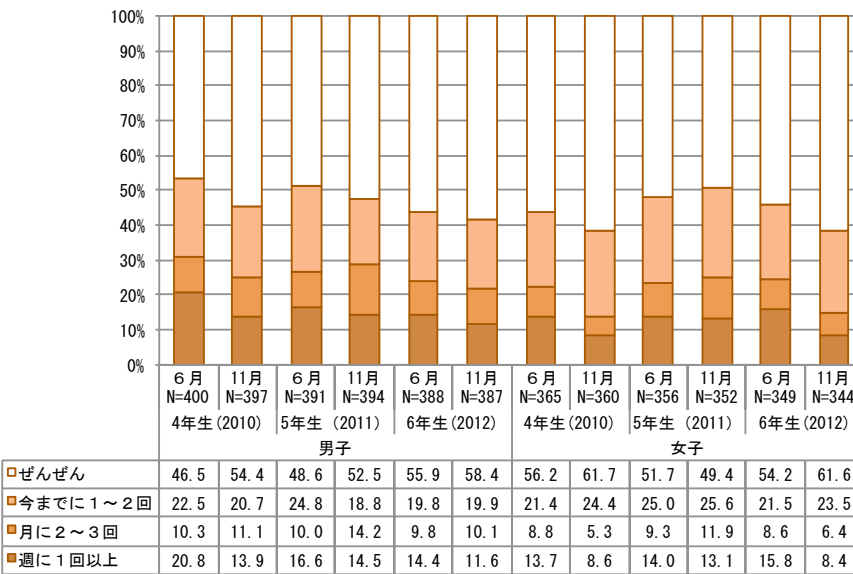


○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

男子は4年生から6年生で減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。

問5イ. いじめ被害：からかう・悪口

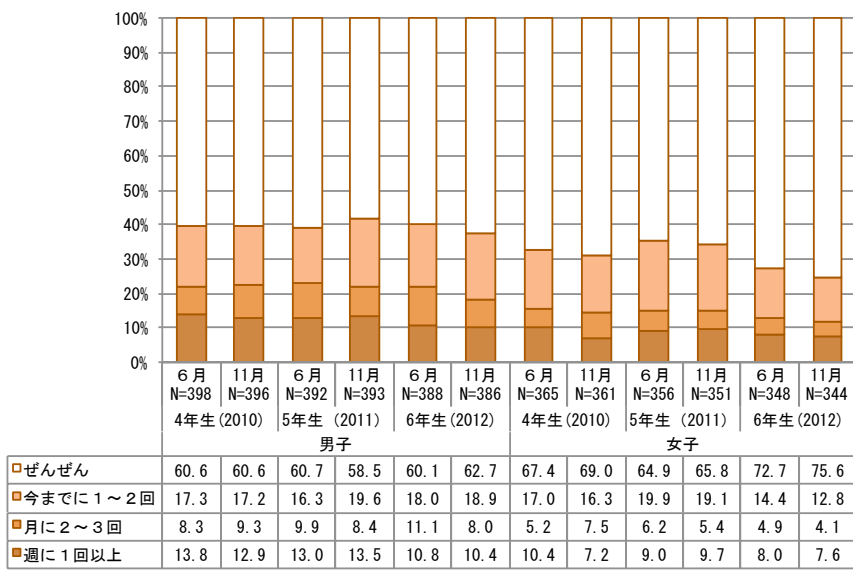


○からかう・悪口

男女共に被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

男子は4年生から6年生で減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。

問5ウ. いじめ被害：軽くぶつかる・叩く・蹴る



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

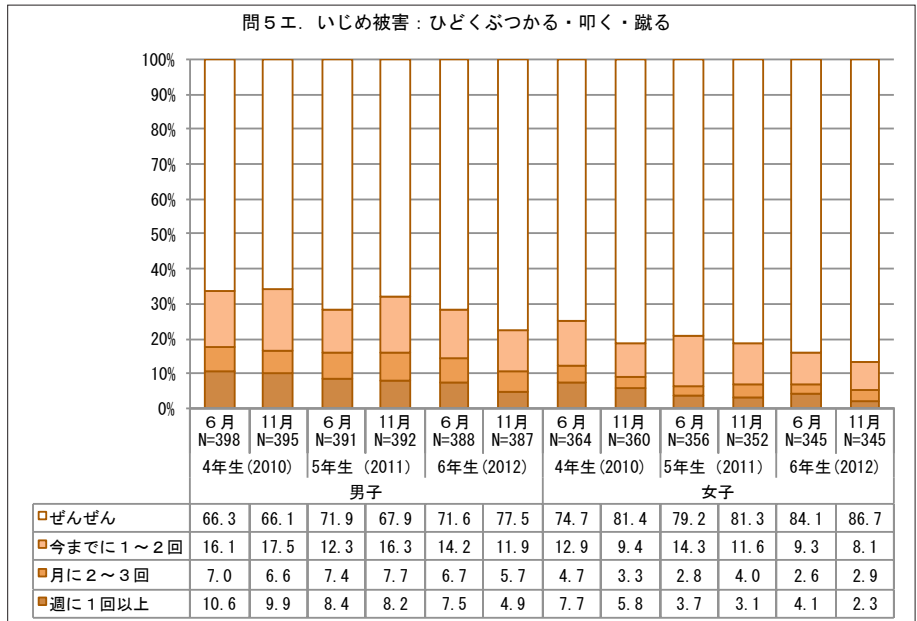
やや男子に多い傾向が窺えます。

男子は4年生から6年生でわずかに減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の被害経験率が高い傾向が
窺えます。

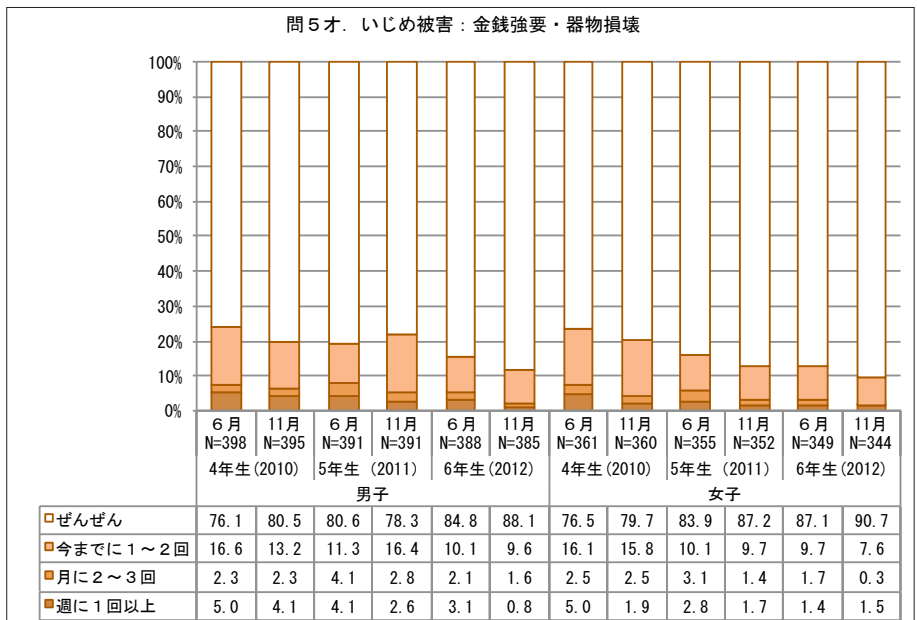
4年生から6年生にかけて、減
少する傾向が窺えます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に被害経験率は低いですが、
男子に多い傾向が窺えます。

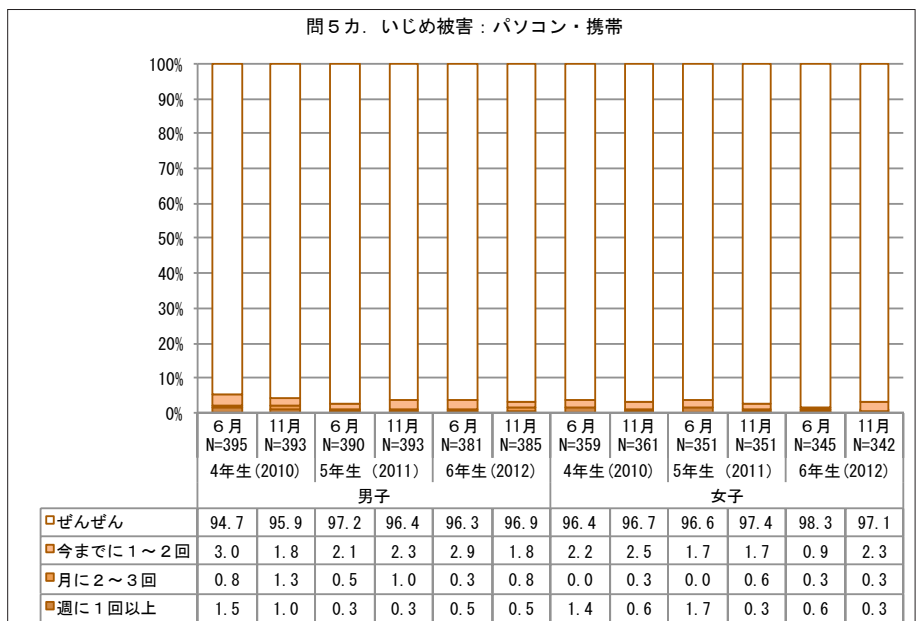
4年生から6年生にかけて、少
しずつ減少する傾向が窺えます。

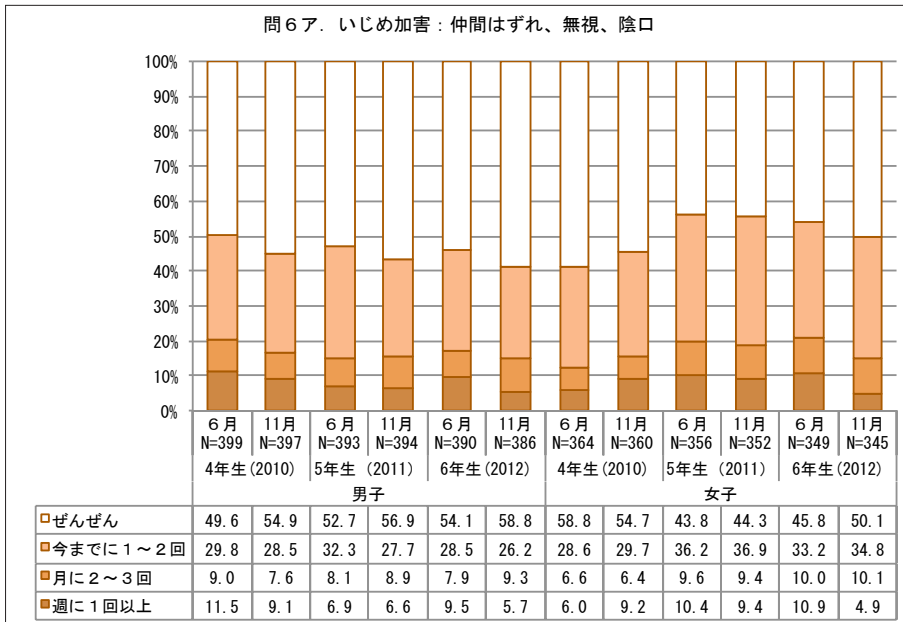


○パソコン・携帯

男女共に、最も被害経験率が低
い行為です。

学年進行に伴うはっきりした傾
向は窺えません。

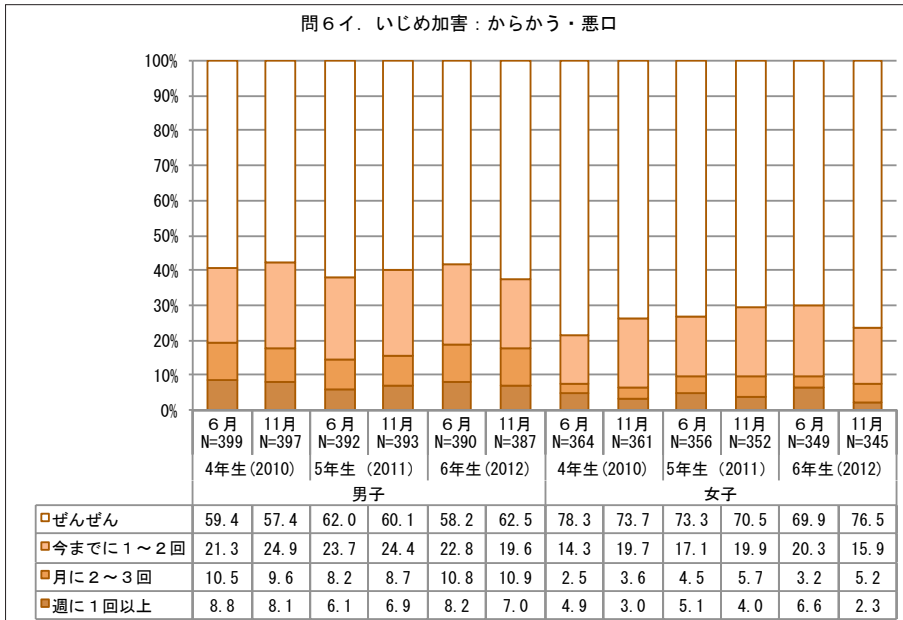




○仲間はずれ・無視・陰口

男女共に加害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

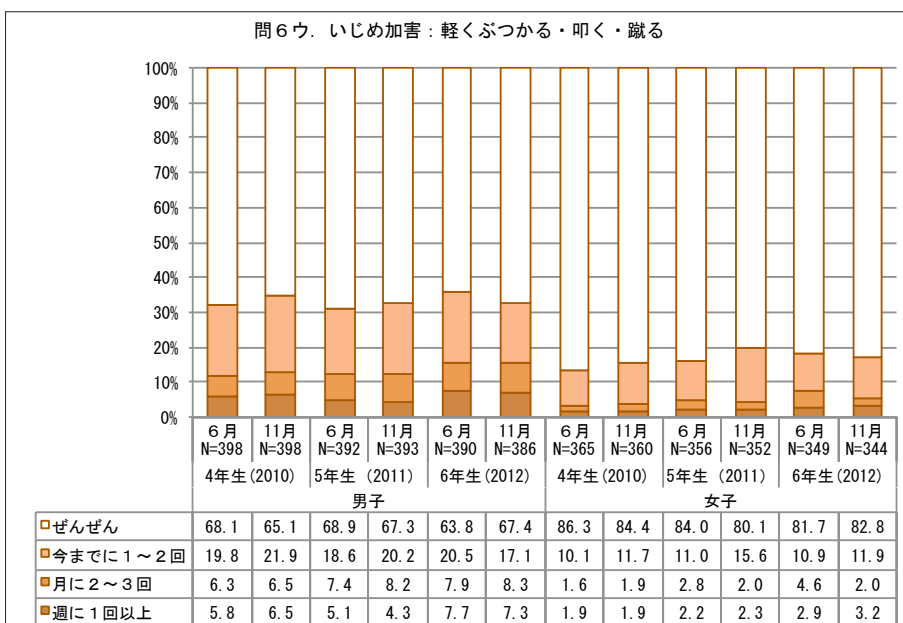
男子は4年生から6年生でわずかに減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。



○からかう・悪口

男女共に加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。

男子は4年生から6年生でわずかに減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。



○軽くぶつかる・叩く・蹴る

日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、他の国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

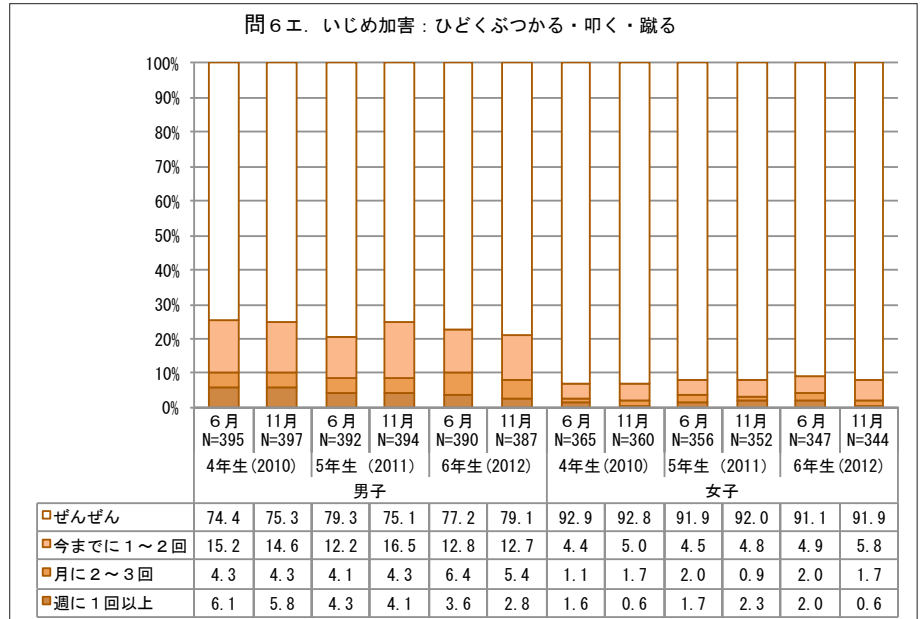
男子に多い傾向が窺えます。

学年進行に伴う傾向は、頻度の高い加害は、5～6年生でやや高めの傾向が窺えます。

○ひどくぶつかる・叩く・蹴る

男子の加害経験率が高い傾向が
うかが
窺えます。

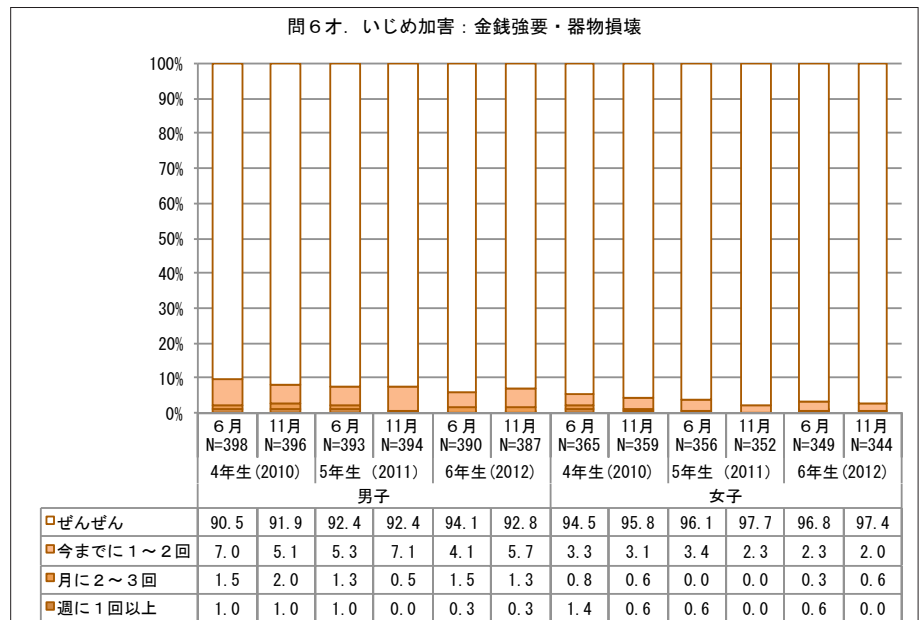
4年生から6年生にかけて、減
少する傾向がうかが
窺えます。



○金銭強要・器物損壊

男女共に加害経験率は低いですが、やや男子に多い傾向がうかが
窺えます。

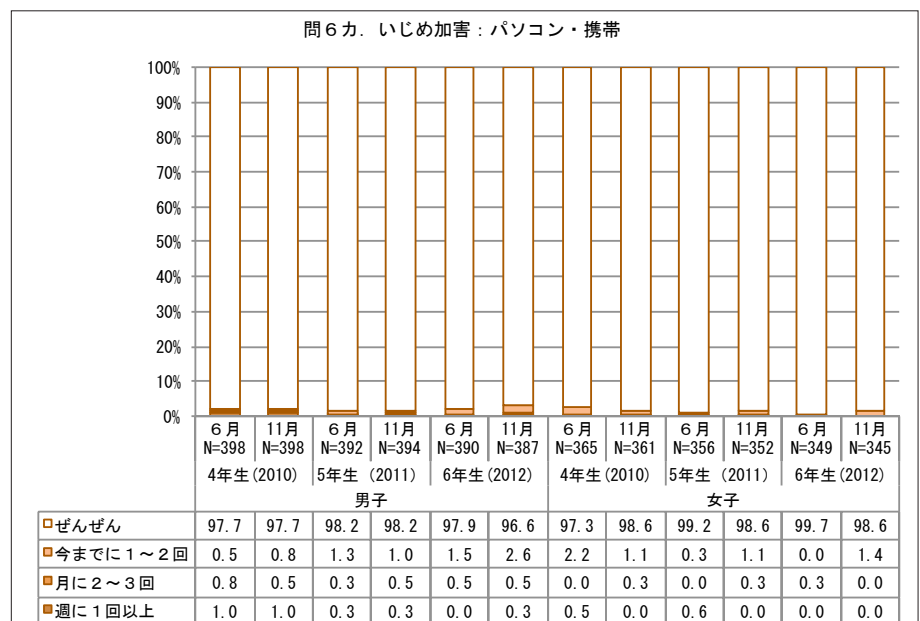
学年進行に伴うはっきりした傾
向は窺えませ
ん。



○パソコン・携帯

男女共に、最も加害経験率が低い行為です。

学年進行に伴うはっきりした傾
向は窺えませ
ん。





文部科学省

国立教育政策研究所

National Institute for Educational Policy Research

編集 生徒指導・進路指導研究センター

T E L 03-6733-6880

F A X 03-6733-6967